

退会届受理リスト (1983・6・8現在)			
コード	氏名	所 属	
	萩野 堅		
	小林 純	岡山大学農業生物研究所	
	大森貞子	工業技術院地質調査所	
	陸 厚	三省堂	
	渋谷靖弘	東京大学理学部	
	古田正次	愛知県公害調査センター	

会員現況 (1983・6・8現在)				
	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1982年12月	858	12	3	873
1983年6月	862	12	3	877
(増)	4	0	0	4
	(以上)			

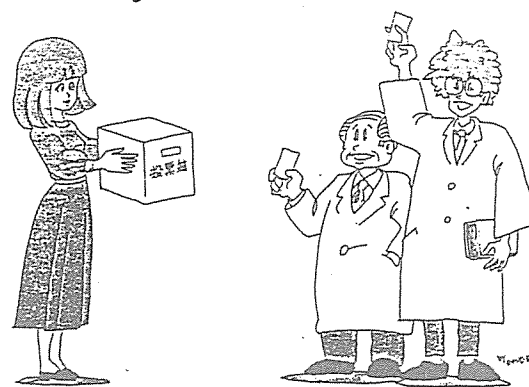
学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡会付置 隕石学・宇宙化学小委員会報告

標記小委員会の会合が、昭和58年7月5日宇宙科学研究所において持たれました。出席者は本田雅健、増田彰正、武田弘、小嶋稔、清水幹夫、長谷川博一、松井孝典、矢内桂三、田中剛の9名で、本田委員長から経過報告がなされ、今後の活動方針が討議されました。

まず、会の存在をより強固なものとするため、会員(隕石研究者)の把握に努め、研究者名簿を作成することが提案されました。これは現在、作成作業中です。

次に活動の重点として、国内における隕石研究者の便を図るため、非南極隕石をまとめて保管し、必要な配布を行うことの是非が論じられた。これは現在、いくつかの研究所において埋もれつつある隕石を発掘集中管理するとともに、研究上必要な隕石の共同購入、外国の研究機関との隕石試料の交換等を行い、国内における研究試料の共同確保をめざすものです。これは保管場所等の問題もあり、結論は出ておりません。
(田中 剛)

大切な選挙です!
忘れずに
投票しましょう



日本地球化学会1984・1985年度役員選挙
投票締切 9月30日

“ニュース100号記念”記事や御意見をお寄せ下さい
本ニュースは年3回(大体5月、9月、1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回100号は1月10日/切1月下旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒350 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 企画室
電話 0298(54)3572

発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 100

1984. II. 7

会長に就任するに当って

松尾禎士(東京工業大学 理学部)

本会に対して重大な責任を負っている会長という立場になって改めて感じることは、本会は日本の地球化学のための利益代表として十分に機能しているであろうかという疑問である。1953年に本会の前身である地球化学研究会が約200名の会員のもとで発足したとき、会員は日本における地球化学の研究者が一つの組織を持ちうるに至ったことを純粋に喜びをもって迎えたことであろう。当時は利益代表としての期待はほとんどなかったものと思う。

その後約30年たった。会員数は800名を超え、一年6冊の国際的評価をえている Geochemical Journal、2冊の「地球化学」が会員にわたるようになった。日本学術会議の地球化学・宇宙化学研究連絡会を構成する主要学会として、本会の国際的・国内的基礎もかたまってきた。地球化学の分野の国際学会も日本で数多くひらかれた。諸先輩の御努力によって、われわれ会員は十分に利益をえているといえる。日本における地球化学の歴史の浅さを考えると、よくここまで来たという感じさえする。*

一方、学会としての基礎がかたまってきた現在、喜んでばかりいられない事情も少なからず存在する。最近20年間、地球科学の分野では各種の国際計画が行なわれ、また行なわれようとしているが、地球化学は概して乗り遅れた。日本主導の国際的地球化学計画もない。地球化学の分野に組織的に巨額の研究費が流れこんだこともない。戦後日本の大学で新設された地球化学の講座数は、例えば生物物理学のそれにくらべると1/5以下である。従って若い研究者の育成の場所が限られている。日本では地球物理学は大勢の人が知っているが、地球化学を知っている人は少ない。これらのことをあげつらうのは、日本の地球化学の歴史の浅さを考慮しない行為かもしれない。しかし、上にのべた事実と感想は会員諸兄姉に訴えたいことである。

日本では歴史的事情もあって、地球化学研究者には化学出身の人の割合が高い。地球化学を定義することは困難であるが、地球化学を専攻していると考えられる人々が、その出身が地質学であったり、地球物理学であったりするために主な学会活動の場として本会选择にくいという傾向がある。本会は化学出身者の仲よしクラブであるため排他的雰囲気があるという批判があるが、私自身が化学出身であるため自信をもって否と言えるほど客観的な立場にない。

私は研究者になってから絶えず本会に関心を持たざるを得ない境遇に恵まれたが、他の学会に対しては消極的会員であるにすぎない。どの学会でも消極的会員の割合は決して低くないであろう。本会でも消極的会員の割合を増やすようなことはやってはならないが、敢て危険をかえりみずに一つの意見をのべさせていただくならば、本会が日本の地球化学の利益代表として機能するための方策の一つは、会長への権限の集中である。

日本の医師の利益代表の頂点にいた武見さんの例をみるまでもなく、会長個人の力がいかに組織に影響するかは自明である。独裁をするには会の規模は関係ない。会長が独裁するのにふさわしい個性と識見をもっており、会員はそのためのリスクを甘受できればよい。私の記憶に誤りがなければ、数十年前、米国の海洋学会は当時海洋学に無縁ではあるが、行政能力抜群であるとみなされた H. Brown を会長に選んだ。その結果は、海洋底掘削の大事業、深海潜水艇の活躍などに実を結んでいるといえよう。

近い将来、地球化学には縁が薄くても、日本の地球化学の利益代表になりうるような人を会長に選んで大幅の権限を与えることは、日本的風土になじまないかもしれないが一考に値すると思う。私自身は、語るに落ちるけれども、あらゆる点で力が足りないことを自覚する。ただ私は日本地球化学会がそろそろ日本の地球化学の利益代表という方向へ動きはじめてもよいのではないかという感じだけは強く持っており、また何が利益といえるのかということについてもよく考えたいと思っている。この点について会員諸兄姉の御意見をいただければ幸いと思うのである。

*地球化学という言葉は、日本では柴田雄次先生によって1926年にはじめて使われた。地球化学、9、1(1975) 参照

十年一昔

川辺岩夫 (愛媛大・理学部)

筆者が地球化学会に入会したのは、今から頂度十年前のことである。四年生から大学院へ進む時期に当る。当時のことをふりかえって思い出すことの一つに、「地化将委新聞」と題したガリ版刷連絡紙のことがある。将来計画委員会の下で発行されていたこの連絡紙には、会員はもとより、この学会周辺に位置する人々から寄せられた日本地球化学会に対する現状批判、期待、etc. についての実に様々な意見が掲載されていた。

地球化学なるものを専攻しようと決めるに当っては、個人的には幾つかの動機があったものの、そのすべてが積極的動機ではなかった。自らを省みての「不純」な動機もそこにはまぎれこんでいた。そのような自らの選択動機と照らし合わせながら、毎号のこの連絡紙に記されてくる色々な研究者たちの「肉声」に接することは、少なからず精神的緊張を伴うものであった。

あれから十年。もう一昔前と呼べる時間が経過したことになる。将来に大きな不安を抱きながら、あの連絡紙を緊張して読んだ一学徒も、今は細々とではあるが「地球化学」の看板を軒先に掲げる側になっている。十年後の今、もう一度この連絡紙を読み返しながら、自らのこの十年の軌跡と十年後の将来について考えてみる時、あの時の緊張感が何となくよみがえるような気がする。

今から四年ほど前のことになる。朝永振一郎氏の「物理学とは何だろうか」が出版された時のことである。あの特徴ある文体に読み惚れながら頁を繰るうちに、下巻最終章の「科学のもう一つの面」と題する記述に出合ったのである。ここで朝永先生は、「自然の女神のベールをめぐって顔をのぞこうとする」科学ではなく、「ベールをそのままにしながら自然を知ろうとする」科学もまた、一つの科学であることを説いておられる。創設後間もない地球科学教室に赴任することによって、自らの立場と周りの環境は大きく変化し、これからの研究をどうしようかと考え込んでしまっていた当時の筆者には、何かしら大きな励ましの言葉を贈られたような気がしたのである。このことは、local なことであっても、この地にて、地震に関係する地球化学現象を調べてみようかと決心する一つの契機になったように思う。そして、「自然の女神」についての朝永説と、あのガリ版刷連絡紙を読んで味わった緊張感は、筆者の心の内では決して無関係ではないように思っている。

つい最近のことである。G C A (1983) 8月号に、The past is the key to the future と題する B. R. DOE による Geochem. Soc. Presidential Address が掲載さ

れているのが目にとまった。ここで DOE は彼のいう frontier science に若い研究者が積極的に参入して来てくれるよう熱く訴えかけている。frontier science / 何とすばらしい言葉であろうか。十年後の将来、「自然の女神」に召されるのは、やはり、「frontier spirit」の戦士たちなのであるか？そしてその時、思い悩んで竹槍を取ったあの島国の戦士はまだその命脈をとどめているだろうか？これは、十年後の将来に対するあまりにも卑屈すぎる自問であると思いたい。

共同研究の公式

松久幸敬 (地質調査所)

最近では、研究テーマは1人の人間の力量を超えるものが多くて、いきおい共同研究という研究形態が一般的となってきた。そこで、読者の皆さんも、共同研究というものがあるという問題を含むものなのか、体験も含めて充分ご承知のことと思う。もう6、7年も前のことだったと思うが、共同で、あるいはグループで研究をするという場合、それには2つの全く異なる場合があって2つの式で表わされるということを、「共同研究の公式」と称して2、3の人に得意になって話したことがある。どういう式かというと

$$A = \sum a_i \quad (1)$$

$$A = \prod a_i \quad (2)$$

というもので、Aは研究の成果、 a_i はグループのi番目のメンバーの研究能力である。(1)の式では、メンバーの能力の大小にかかわらず、メンバーの数が増えるほどA(成果)は大きくなる。一方、(2)の式では、メンバーの能力aが1より大きければ(つまり一人前以上であれば)Aは大きくなるが、aが1より小さければ、メンバーの数が増えるほどAは小さくなる。という単純な話である。

わかりきった話なのであるが、当時はまだ、共同研究はすべて(1)式で表わされると勘違いしている人たちが私のまわりにはいて、それでこんな「公式」を思いついたのだと思う。広い地域から化石を探し出すとか、落下した隕石を見つけ出すとかいった仕事は(1)式の場合であろうが、創造的研究は、多くの場合(2)式で表わされる。自分のかかわっている仕事が多かれ少なかれ(2)式で表わされるのか、そしてそれにふさわしく a_i を扱っているかどうか、これはひとごとではない。

せっかくの「ニュース」の紙面をこのような小話で埋めて申しわけないが、何年か前に思いついて、そのまま「公表」する場もないまま頭の隅にあったものを吐き出させていただいた。

ポストプレートと地球化学

能田 成 (京都産業大学 教養部)

日本の地球科学研究者の中で特に地質学をバックグラウンドとする人達には、プレートテクトニクスに対する拒絶反応がすこぶる強烈であった。大学紛争の華やかなりし頃、地質学者のあるグループの連絡紙に「プレートテクトニクスを支持する者はアメリカ帝国主義の手先云々……」という文章をみて私は心底驚ろき、感激したことを思い出す。それから10年も経つと、メランジェやアクリーションといった言葉で地質体を語るのが常識のようにになっている学会の雰囲気、いささかの感慨をいだくのは私だけではあるまい。勿論、現在でもテーチス地向斜と共に突撃する勇士もおられて、それはそれなりに御立派というべきである。それよりも十年前は〇〇地向斜一辺倒で、現在は△△アクリーション万才という人達は、どのように思考方法を変化されたのであろうか。私はここで「転向」一般をすべてけしからぬと言っているのではない。むしろ時間と共に考え方に変化を生ずるのは当然のことだと思っている。プレートテクトニクスについていえば、それを拒絶していた時と容認した後とは、大袈裟に言えば、地球をめぐる自然観が大幅に変化したことを意味するものであるから、何らかの総括があってもよからうと思うのである。そうでないと、また新しいモデルが出現した時に、やはり始めはヒステリックに猛反対し、しばらくすると羊の如く従順にこれを受け入れるのでは、誠につき合にくい。

いっぽういわゆる岩石学や地球化学の分野でのプレートショックがさほどさまじくなかったのは、元来の研究体系がプレートによってその基盤がゆらがなかったためといつてよからう。とはいえ、今では火山岩の成因もプレートテクトニクスとの関連で語られるのであって、地球化学とその周辺がテクトニクスと無縁であろうはずはない。日本ではプレートに対する取り組みが遅れたので、今後しばらくは、その枠組みでの考察をより一層進める必要があろう。しかしそれは最早常識的なことであって、そこからは奇想天外な結果を期待しない方がよいのではないか。

プレートテクトニクスの創成に加わった人達の一部は、すでにポストプレートに向けて研究を進めていることが、いくつかの雑誌で窺い知ることができる。地球化学が既成の体系や方法論に安住することなく、より毒性の強い地球科学を指向するとすれば、ポストプレートの奇天裂テクトニクスの動向に油断なく食いついてゆく、やや軽佻な岩魚の如き精神構造が必要なものかもしれない。ただし食いついた後どうなるか全く不明である。

海洋化学の動向

野崎義行 (東大・海洋研究所)

我が国ではあまり認識されていないが、海洋化学は宇宙、地球科学の中でも最近最もめざましい進展をとげた分野の一つであろう。これは、GEOSECSのような全海洋をカバーする大規模研究計画が1970年代に実施されたこともあるが、高感度高精度の分析法の開発や、サンプリング技術、研究者の質の向上などがちょうど目的に適合するようになり相乗の効果を発揮したものである。例を海水中の微量元素にとると、それらの多くが濃度すら明らかでなかったものが、わずか数年の間にまだ不明の元素を周期律表の中から見つけるのに苦勞をするほどにまでなっている。自然における現象を理解しようとする者にとって、正しい分析値を得ることが先ず第一である。この意味では、やっとスタート地点に立ったわけで今後分布を支配しているメカニズムの解明へと進むことになろうが、それにしても何と長い道程であったことか。

その一つの原因として、フィールドにおける技術の重要性と共同研究に対する認識の不足があげられよう。いかに分析がすぐれていても、道路に落ちている石ころや汚染された試料を測っていたのでは意味がない。かと言って正しいサンプルを得るために新しい採水器を考案実用化し、かつクリーン技術を駆使して多元素の分析まで全てを個人レベルの研究で行うことはむずかしい。また、海水の大量採取やセジメント・トラップによる貴重な試料が得られるようになると、それから最大限の情報を得るために多くの研究者が協力して初めて実のある成果が期待できる。海洋における現象を扱うには、海洋生物、物理、地質学の分野との共同も不可欠である。今後も目的に応じた研究者の離合集散がより円滑かつ適切に行われれば、もっと多くの成果が期待できよう。



地球化学の近代化とは

鈴木 款 (気象研究所)

近年、地球化学においても、新しい分析機器や大型の実験装置を用いた研究が多くなってきた。そして、これらによって得られた多くの新しい情報をもとに、電算機によるシミュレーションあるいはモデル計算も盛んである。こうした状況に対して、地球化学も、“定性的思考から定量化へ”という一歩をやっと踏み出したという意見もある。こう書くと、地球化学の進歩は、測定技術の進歩なしには“近代化”は望み得ないということになる。たしかに、ここ十数年の地球化学の進歩は、技術の進歩に負うところが多い。しかし、地球化学という学問そのものの近代化がはたして成し遂げられてきたかどうかは疑わしい。

地球化学の研究対象は物質の運動形態を空間的、時間的に明らかにしようとするもので、測定された現象の原因と結果を直接的に結びつけることが難しい分野である。つまり、地球化学における現象は原因と結果がお互いに逆作用するいわゆる交互作用や、相互に関連し合う連鎖作用が複雑にからみあっている。

ここに地球化学を研究していく困難さがあると思われる。こうした困難を克服する方法として、モデル計算やシミュレーションは一つの有力な手段にはちがいない。しかし、これらの方法は、言わば機械的因果律と言われる単純な論理に基づいて行われるものであり、自然現象を認識する一つの手段にすぎない。

では、地球化学が直面する困難を打開する道は何か。この問題に決定的な答えを出すのは大変難しいが、その一つは、新しい機械や技術に研究テーマを依存させるような誤った近代化を改め、何をどう認識し、深めていくかというテーマ自身の近代化を進めていくことであると思う。それでは、テーマの近代化とはどういうことなのかということをお次に考えてみた。私達の研究の目的の一つは、物質がどのように挙動しているかを明らかにすることにある。私の考えでは物質の運動形態を明らかにするには、やはり、自然現象に対する階層性について認識することではないかと思う。

近年、私の研究室では「海水中の元素の化学形」について研究を行っている。ある元素は有機物と深く結びついて存在しているし、ある元素は無機形でのみ存在している。元素の挙動はその化学形に依存している。このテーマは、元素の挙動を、従来のように単体的レベルで扱おうとしているのではなく、分子的レベルで扱おうとするものである。つまり、物質の運動形態の階層性を認識することによって必然的に出てきたテーマである。そして、このテーマに新しい技術が付加することによって初めて研究の近代化は成し遂げられるものと考えられる。

Geochemical Journal への投稿のお勧め

現在 G. J. は年 6 回、全部で約 300 頁を刊行しています。掲載される論文は約 40 篇になります。編集担当者は頁数をさらに増やすことを考えていますが、のためにはさらに多くの投稿が必要です。とくに若手研究者に投稿をお願いしたいのです。

G. J. の編集についてはいろいろご批判もあろうかと思えます。これまでも審査基準、審査期間などについていくつか問題点が指摘されていますし、編集委員会としてはその改善に努力している積りです。とくに審査を迅速化し、なるべく早く印刷にまで持って行くことに主眼を置いています。投稿したのにいつまで待っても連絡がないときはご遠慮なく催促して下さい。その原因の多くは審査員からの返事が遅れていることによります。

ご参考までに受理されてから印刷まで時間が要りすぎる理由をあげてみます。

- 1) 投稿された論文の英文が不完全なために、審査員が難渋し、審査が長びく。また英文は何とか読めるが冗長であるために困惑したという審査報告を受けとったこともあります。
- 2) 審査意見がついて論文が著者に戻されたときの対応に時間が要りすぎる。それほど大きな修正が求められているわけでもないのに、修正稿が編集委員長のところへ送られてくるまでに半年ぐらいいも要ることがある。一番困るのは、著者がどのように対応しようとしているのか、一言も連絡がないことです。

一般的にいうと、論文が長大なほど処理に時間が要ります。形式などについて投稿規定を守っていないものについても同様です。原稿を作成される前に G. J. の最新号をごらん下さい。

投稿される時、お判りにならない点がありましたら編集委員長におたずね下さい。

G. J. 編集委員長
一國雅巳

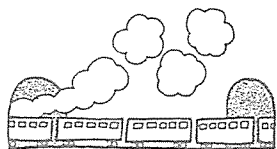
日本地球化学会 2 月例会

高温の初期海洋にまつわる問題

地球化学会会長 松尾禎士 (東工大)

と き：1984 年 2 月 25 日(土) 14 時～16 時

ところ：東京大学理学部化学教室本館 4 階講義室



日本の地球化学の落伍

私が日本で地球化学という一つの自然科学の分野に於ける新化学の研究開拓を提唱したのは大正 13・4 年頃のこと、たしか地球化学という四文字も私が言い出したものと思う。よく日本の地球化学発祥の頃の科学的記事には、私が Vernadsky の著書 La Géochimie を読んでこのような新しい分野が化学の内にあることを知ってこれにとりつかれたように書かれたり言われたりしている。勿論ヴェルナドスキーの書物から多く示唆を得たことは事実だが、私は彼の La Géochimie を手に入れる前からこの化学の一分野を考えていた。それは私が 1913 年フランスから帰って始めた希元素含有鉱物に対する発光スペクトル利用の分析と希元素含有鉱物の日本に於ける分布状態即ちこれら特殊元素の分布状態を知ろうとしたとき、これは地球表面の化学のほんの一端であるが、この外にもいろいろの化学的現象が存在するであろうから、この方面に研究を集中するとき地球化学というべき一分野が化学の内であってもよからうと主張したわけである。その後ヴェルナドスキーの地球化学という書物を丸善の店で発見して驚き且つここに仲間がいるという喜びを感じたのである。私たちが最初に取り扱ったのは希土類元素の鉱物でこれらは皆放射性でありその認定は当時ガイガー管などなく金箔検電器をかついでいってそれと思われる鉱物を拾えば一々検電器にかけて放射性の有無を調べて行ったもので標品の採集には苦労した。鉱物採集にもいろいろ目的がある。珍しい鉱物や結晶の見事な鉱物をあさって専門家や学者や学校の標品として売りつける鉱物屋や素人の鉱物好き——これは案外多い——然も立派なコレクションの持主が私の知っている限りでも 3・4 人はいる。それから鉱物採集者の第三種は、学問上の必要から鉱物の分析を行って成分を徹底的に明かにし、これが含む特定元素の分布を研究し、又これに関連してこれら特定元素例えば希土類元素や放射性元素を含有する地質や岩石を又これを含有するペグマタイトのような鉱物の分布を知り地球表面の物質のモザイクの構造を日本のほんの小部分の地点についてでも知らんとする化学者、この第三番目の鉱物人に対して地球は一つの化学研究の場であり、地球化学という恐らく段々と広汎な目的や研究対象また理論などを含むに至るであろうと考え、そして我々はこの化学の一分野地球化学の極めて素朴な出発者になろうと大正前半頃 2・3 の共同研究者と共に着手したわけである。

日本の地球化学というものが次第に独立の様相を呈し初めたのは昭和十年頃でそれは東大理学部化学教室が温泉や火山噴出物の研究に手をつけ続々と結果が発

表されるようになってからである。さてどうして温泉や火山噴出物の研究が急に活発になったかという、私が当時帝国学士院に請求していた研究費が認められて年々 7,500 円(?) ずつ 2・3 年水の手が続いたからで木村、野口、岩崎、中井、黒田、小穴等の諸君が実によく働いてくれて地球化学の本格的な研究が 5 年間に 50 篇以上も発表せられ、これが刺激となって日本中の大学で類似の研究が翕然として興った。これは日本が火山国温泉国で研究対象にこと欠かないからであったことは確かであるが、これらの内には分析化学の応用的研究が多く、地球の内部構造とか、火山と温泉の地球内部に於ける関係とか、地球内部に起る構造変化を司るエネルギー源の問題などなど取組むフィロソフィーに欠けた安易な研究が多かった為、その後数年の間にこの種の研究は頭つきになって来た。勿論戦争苛烈と情況不利のため一般に戦争に関係の薄い研究は資金が得難くなったことが地球化学的研究の低下に影響したことは確かであった。

しかしもっと本質的なことは化学者に地質学や地球物理学の確固たる素養が足りなくまたこの方面の勉強を怠っていたこと、地球なる惑星に関してもっとつきつめた研究プランが欠けていたためでもある。尤も近頃アメリカあたりの地球化学が目録んでいるマンツルの探求的研究は一種の巨大科学として莫大な費用を要するわけであるから本邦の地方大学などの地球化学者には一寸手を出し兼ねるわけで日本の温泉や火山を対象として興った化学の一分野が斜陽化するのとは当然のことであろう。しかし戦後にも日本の地球化学は決して消滅したわけではなく、殊に水圏に於けるそれは菅原教授の独創的なアイデアに支えられて発達の一途をたどり殊にまた同君が屢々渡米して彼の地の地球化学者と意見を交換し、遂に従来存在していた地質学海洋学の国際機構の内に地球化学を入れることに成功せられたことは日本の地球化学者を大いに勇気づけたことは見逃すことは出来ない。そして遂に 1970 年 9 月に水地球化学生物地球化学の国際会議を東京に開催するに至ったことは私の表題に掲げた日本の地球化学の落伍という文句と矛盾しているように見える。なおいわゆる地球化学的研究が昭和の 15・6 年頃程旺盛ではなくとも本邦化学界に定着した証拠としては、先ず地球化学研究会という同好者の意見や情報の交換の場ができた年 4 回位のニュース発行が実現したのが昭和 32 年頃のことやがてこれを土台に地球化学会という学会にまで発展するに至ったことは人の知る処である。

ここで今一つつけ加えて置くことがある。それは名古屋大学理学部にはその創立当時から地質学の教室というものが予算の関係から考えられていなかった。戦

後各帝大総長は一応退陣することとなり、当時の沢名大総長もその職を辞せられ後任として田村春吉医学部教授が選ばれた。私もそろそろ退陣を考えていたが、敗戦後の混沌時代にせめて疎開各教室が名古屋に戻って研究や教育が形だけでも安定するまで教授諸君と行動を伴うべきであると考えてなお在職したが、この間田村総長に地学方面の教室の新設を相談した。私はこの教室を従来の各大学にある地質学教室でなく、地球科学教室と名乗ってその構成数講座を地球物理、地球化学、古生物学、岩石地質学、天文学などとし、地球という惑星を総合的に研究する教室としたいという構想であった。近頃は地球科学という四文字は何の抵抗もなく使われているが、戦争直後時代には中々受取って貰えなかったが実行力旺盛な田村君は了解して熱心に当局に働きかけてくれて遂に実現した。このような教室は名古屋以外には今日でも存在しない。実はこのような目的を持つ教室としては講座数も以上のようなものでは足りないのでは名大でも二十余年の後の今日内部でいろいろ議論を生んだそうである。これは私の失敗であるが、故田村総長に地球科学という新構想の教室を設ける必要を力説した際、この新教室は今一つ一つのテストで将来は恐らく初めの講座数の倍以上の大きなものに発展しなければ意味を失うであろうということ吹き込まなかったことである。尤も田村総長が意外に早く病没せられたから、たとえ同君が了解しても実行に移す時は実際に於てなかった。そして今日でもこの教室には地球化学は一講座しかない。只管原教授在職中に水質研究施設を理学部に作られ、これを発展せしめて水地球化学研究所とする同教授の構想であったそうであるが、今日のところまだ実現のめどがつかないようである。

以上の形勢から見て日本の地球化学は四十余年の年令で正に人間ならば最も油の乗った働き盛りの時機であり、実際研究会ができ討論会も年々開かれ遂に学会にまで成長して会員数も500(?)位はありと聞く。また本年は水に偏しているとは言え国際会議まで開催され多数の外国学者も来日した。即ち客観的には日本の地球化学は一応の格好はついているが、欲しいのは火山でもよい、温泉でもよい、海洋でもよい、誰か日本の地球化学にピークを作る人はいないだろうか。最近の地球化学で活躍しているのはやはり地球物理学者と地質学者のようで地球化学者は霞んで見える。私が落伍というのは此点なのである。—昭和45年晩秋—

この文章は、余話「日本の地球化学の落伍」(昭和58年5月27日発行)から、本文のみ転載したものです。転載を御快諾いただいた柴田先生遺稿整理有志の野口喜三雄先生、酒井勝郎先生にお礼申し上げます。

日本地球化学会庶務へのお問い合わせは下記へ
お願い致します。
庶務幹事 小涼和子
〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1
東京都立大学 理学部
電話 03-717-0111

1984環太平洋国際化学会議について

アメリカ化学会、カナダ化学会、日本化学会の共催により表記国際会議(The 1984 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies)が本年12月16日から21日にわたってハワイのホノルルで開催されます。詳しい案内は「化学と工業」本年1月号(日本化学会発行)に出ておりますが簡単に紹介します。

地球化学関係として次の5つのシンポジウムが予定されております。その他分析化学、環境化学関係のシンポジウムも予定されております。講演申込〆切は本年5月1日、申込方法は日本化学会事務局PAC CHEM '84係(〒101 東京都千代田区神田駿河台1-5)に申込用紙を請求し必要事項を記入の上〆切日までに係に提出することになっています。シンポジウムについてのお問合せは下記の各シンポジウム世話人の方々に行ない下さい。

1. Gas Geochemistry Pertaining to Volcanism, Geothermal Resources and Mineral Exploration. M. Sato (USGS)、松尾禎士(東工大理)
2. Geochemistry of Fossil Fuels. F. O. Simon (USGS)、P. G. Hatcher、石渡良志(都立大理)
3. Marine and Estuarine Geochemistry. A. C. Sigleo (USGS)、W. S. Moore(Univ. South Carolina)、服部明彦(東大海洋理)
4. Nuclear Cosmogeochimistry and Meteoritics. P. Kuroda(Univ. Arkansas)、C. B. Moore(Arizona State Univ.)、小嶋稔(東大理)
5. Mechanisms of Transformations of Organics in Sediments, Soils and Groundwater. D. L. Macalady (Colorado School of Mines)、D. A. Cherry (Univ. Waterloo)、大槻晃(国立公害研)

さらに12月14日~16日にはハワイ火山へのField Tripも計画されております。

(石渡良志 都立大理)

10th IGES-3rd SMGP に出席して

椎川 誠(秋田大)

1983年8月27日~9月2日、Helsinkiにおいて、10th International Geochemical Exploration Symposium (IGES)並に、3rd Symposium on Methods of Geochemical Prospecting (SMGP)が開催された。参加国は35、参加人数530名、日本からは1名であった。International Geochemical Exploration SymposiumはAssociation of Exploration Geochemistsが主催し、第1回が1966年、Ottawaで、爾来、隔年毎に米国、欧州、カナダで開かれ、回を重ねること10回であるが、今回は昨年サスカチワン(カナダ)での第9回に引続いて開催された点では異例で、次の第11回は、1985年にトロントで予定されている。第1回目は出席の機会を逸したが、第2回目から今年の第10回までは、継続参加することが出来た。これら国際地球化学探査シンポジウムへの日本からの参加者は、毎回ともほとんど1人だけのことが多く、日本では学会での発表論文内容についてもほとんど知られることもなく、また関心の度も薄い。この責任の一端を痛感しているため、今回(第11回)のシンポジウムについて、その概要を紹介してみたい。

Association of Exploration Geochemistsが発足して1966年以前は、研究会として活動を続け、この学会が発足後、国際的シンポジウムを開催するようになった。この学会の会員は、65ヵ国からの地質、鉱山地質化学及び地球化学などを専門とする人々で、現在その数305名(61ヵ国)に及ぶ。

この学会は年3回のNewsletterと、3冊のJournal of Geochemical Explorationとを刊行している。今回のシンポジウムはIGESとSMGPとの共催で行われたものであり、IGESにとっては第10回に相当し、International Association of Geochemistry and Cosmochemistryにとっては第3回目のSMGPに相当する。

8月29日からのSymposiumの開催に先立ち、8月27日~28日の2日間、Pre-SymposiumのWorkshopsが次のようなTopicsについて開かれた。これは従来行われたことがないものである。Workshopsのテーマを次に掲げた。

Pre-Symposium Workshops:

- (1) Till Geochemistry in Mineral Exploration
- (2) Biogeochemistry in Mineral Exploration
- (3) Hydrogeochemistry in Mineral Exploration
- (4) Bulk Standards in Exploration Geochemistry
- (5) Thresholds and Anomaly Interpretation

10th IGES-3rd SMGP

講演は、その内容から次の5種のsessionsに分けられ、各sessionとも、講演あるいは発表は、(1) invited lecture、(2) keynote lecture、(3) oral presentation、(4) poster presentation、(5) presentation in the workshopsの形式で行われた。

I~Vまでのsessionsの主要課題をつぎに示す。

Session I: INVITED STATE OF THE ART REPORTS

- 1) R. Frietsch, Metallogeny of Finland, Norway and Sweden
- 2) N. A. Shaikh, Industrial minerals and rocks in Finland, Norway and Sweden
- 3) E. Bergsager, Norwegian oil and gas
- 4) L. V. Tauson, The geochemistry of Precambrian terrains
- 5) R. J. Howarth, Statistical application in geochemical prospecting, A survey of recent developments

DISCUSSION: INVOLVEMENT OF GEOCHEMISTRY IN AID PROGRAMS

Session II: BEDROCK GEOCHEMISTRY

S. V. Grigorian, Primary halos in mineral prospecting (Keynote lecture)

LAST MINUTE RESULTS

DISCUSSION: STATUS OF GEOCHEMISTRY IN MINERAL EXPLORATION

Session III: NEW APPROCHES IN GEOCHEMICAL EXPLORATION

R. W. Boyle, The prospect for geochemical exploration predicted advances and new approaches (Keynote lecture)

Session IV: TILL GEOCHEMISTRY IN MINERAL EXPLORATION, OTHER SUBJECTS

W. W. Shilts, Till geochemistry in Europe and North America (Keynote lecture)

RESULTS OF WORKSHOPS

Session V: MODE OF OCCURRENCE OF ELEMENTS AND NONLITHOLOGICAL FACTORS AFFECTING DISPERSION PATTERNS

V. K. Lukashev, Mode of occurrence of elements in the secondary environment
FAST MINUTE RESULTS AND GENERAL DISCUSSION

CLOSING

Session I~V及びposter presentationを通して

約100をこえる発表があった。

Field Trips: 中央部フィンランドの硫化鉱床その他が準備された。

学会に出席しての雑感:

(1) 開会式は2人のバイオリン、1人のチェロ及び1人のピオラからなる奏者らの奏でるシューベルトの“String Quartet G minor”によって幕が開かれ、Dr. A. Bjorklund 大会委員長挨拶、続いて Dr. P. Malinen 通産大臣の歓迎の辞のあとは、同じ奏者らによるモーツァルトの“Eine Kleine Nachtmusik”の曲が奏でられて幕はおりた。学会の閉会式としては極めてユニークなアイディアで、しかも私には初めて経験したスタイルの式でもあり、今でもこの素晴らしい印象は深い。

(2) 地球化学探査は“APPLIED GEOCHEMISTRY”に属する分野の学問で、サンプル・メディアとして、岩石、土壌、河川堆積物、植物、大気などを用い、これらのなかに含まれる微量元素の異常値の検出によって、鉱床、地熱などの資源を探し出す方法である。この度のシンポジウムでは、とくに地衣類や蘚苔類による生物地球化学探査法の有効性が注目され、今後のこの探査法の発展と貢献への飛躍が期待される。

分析はICP法による活用がめざましく、今後の多元素同時分析法において、この機器が主体を占めることがうかがい知れる。

1978年に“Wolfson Geochemical Atlas of England and Wales”が同時多元素分析法を活用して、完成されてから、続々と海外諸国では、地球化学図の作成が進み、昨年のサスカチオンにおける第9回の国際学会では、ドイツ、中国、南アフリカの地球化学図が報告されたが、本年はさらにフィンランド、スウェーデンその他の国々の地球化学図が紹介された。

日本こそ、世界に先駆けて地球化学図を作成し、地下資源の探査、人間生存環境のインデックスとして、また農業対策などにも、その有効性を活用すべきであるにもかかわらず、地球化学図への関心が薄いことはまことに残念である。1984年2月には秋田県の地球化学図が完成予定、これをきっかけとして、我国全土をカバーする地球化学図作成の気運が促進されることを切に願うものである。

1983年度 第2回 日本地球化学会 評議員会議事録

日 時: 1983年6月11日(土)17時15分～19時40分

場 所: 赤門学士会館

出席者: 北野 康会長 松尾禎士副会長

一国雅己 小椋和子 小倉紀雄

酒井 均 椎川 誠 杉崎隆一
杉村行勇 田中 剛 野津憲治
半田暢彦 増田彰正 馬淵久夫
各評議員

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告

i. 幹事会 (半田評議員)

1983年4月9日に開催した幹事会において、日本学術会議の改革案、IGC、汎太平洋化学会議などについて情報交換をした結果について報告された。また、会費滞納者、国際年代学会委員会からの委託金、その他について議したと報告された。

2. 会計委員会 (小椋評議員)

1982年度の会計について監査を受けたこと、および会計に間違いのなかったことが報告された。

3. 行事委員会 (野津評議員)

1983年6月11日(土)に東京大学理学部化学教室において本会6月例会を以下のように行った。

“考古学と地球化学の接点”

1) 貝塚産貝殻の酸素同位体組成

小池裕子 (埼玉大・教養)

2) 青銅器と鉛同位体組成

馬淵久夫 (東京国立文化財研)

参加者28名

4. ニュース発行委員会 (田中評議員)

No98 5月10日に発行した。

No99 7月上旬原稿〆切、9月上旬発行予定

5. 編集委員会 (一国評議員)

G. J. : Vol. 17 No1 7月発行予定。

Vol. 17 No2-4 原稿はそろっている。

地球化学: Vol. 17 No1 6月末発行予定 (東京湾特集)

Vol. 17 No2 原稿6篇を受付けた。

6. その他

i) 第4回水-岩石相互作用国際集会について (酒井評議員)

参加者は最終的に250名(国外140名、国内110名)になる予定。報告予定の論文数約140編。要旨〆切6月末日、会期は1983年8月29日～9月3日。鳥取県三朝町にて開催。

ii) IAGC 関係 (増田評議員)

8月27日、竹橋会館において Council meeting 開催予定。

iii) 汎太平洋化学会議 (松尾副会長)

地球化学関係は4題が提案され、うち2題は実施予定、他は現在検討中。

III. 議事

1. 年会 (小椋評議員)

申込受付中。参加費および要旨集代あわせて、5,000円の予定。

2. 選挙 (馬淵評議員)

選挙公示をニュースNo97に掲載した。岡部評議員は被選挙権を有するものとした。

3. IGC (万国地質学会議) (松尾副会長)

万国地質学会議検討会議委員として、本会からは田中剛氏を選出した。

4. 国際年代学会委員会からの委託金(松尾副会長)

第6回および7回国際年代学会出席者の旅費の援助に使いきるとの条件で、国際年代学会委員会からの寄付を受けることとした。金額は600万円である。

5. 別刷代値上げについて (半田評議員)

G. J. 別刷代の値上げ幅について資料をもとに種々意見交換を行った。その値上げ方式については次回の幹事会においてさらに検討し、次回の評議員会に提案することとした。

6. 入退会

入会申込書受理リスト(1983・6・8現在)

コード氏名所属備考

1234 葉袋佳孝 東京大学理学部

1236 岡崎和彦 (株)ダイヤコンサルタント

1238 藤川格司 日本大学文理学部

1239 内山征洋 群馬県衛生公害研究所

1235 岡崎 聡 北海道大学理学部 学生会員

1240 今村峯雄 東京大学原子核研究所

1230 坂田 将 工業技術院地質調査所

1237 菅 和哉 道立地下資源調査所

1241 原田武夫 北海道大学水産学部

1243 真鍋武彦 兵庫県立水産試験所

退会届受理リスト(1983・6・8現在)

コード氏名所属備考

萩野 堅

小林 純 岡山大学農業生物研究所

大森貞子 工業技術院地質調査所

陸 厚 三省堂 賛助会員

洪江靖弘 東京大学理学部 学生会員

古田正次 愛知県公害調査センター

会員現況(1983・6・8現在)

正会員 賛助会員 名誉会員 計

1982年12月 858 12 3 873

1983年・6月 862 12 3 877

(増) 4 4

1983年度日本地球化学会 総会報告

10月18日(火)15時から16時まで大学セミナーハウス(八王子)講堂において会員約80名出席のもとに行われた。総会次第は下記の通りである

1. 開会

2. 議長選出

3. 会長挨拶

4. 年会委員長挨拶

5. 1982年度事業および決算報告

6. 1983年度事業および会計中間報告

7. 1983年度事業計画および予算案

8. 4th International Symposium on Water-Rock Interaction (第4回水-岩石相互作用国際集会)報告

9. 1984-1985年度役員選挙結果報告(別掲)

10. その他

11. 閉会

1982年度 事業報告

1. 会員現況

正会員 賛助会員 名誉会員 計

1981年12月末 843 13 4 860

入会 26 0 0 26

退会 11 1 1(逝去) 13

1982年12月末 858 12 3 873

2. 年会、委員会等開催数

年会1回(10/18-20、沖縄)、総会1回(10/19、沖縄)、例会2回(2/13、6/12、東京)、評議員会3回(2/13、6/12、10/17)、幹事会2回(4/17、9/25)、財政委員会2回(5/21、6/10)、会誌編集委員会2回、ニュース発行委員会1回、行事委員会2回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 15 (4、5、6)、Vol. 16 (1、2、3) 6号

地球化学 Vol. 15(2)、Vol. 16(1) 2号

4. ニュース発行

Nos. 94、95、96 (計20ページ)

5. 学会主催、共催

第5回地質年代学宇宙年代学同位体地学国際会議(6/27-7/2、主催)、第19回理工学における同位元素研究発表会(共催)

6. 例会

2/13 生鉱物生成問題への私のアプローチ 北野康氏
6/12 マントルとは何か

1) 元素組成 小沼直樹 氏

2) 同位体組成 兼岡一郎 氏

1982年度決算報告

1) 収支決算書

自 1982年1月1日 至 1982年12月31日

収入の部		支出の部	
科 目	金額(円)	科 目	金額(円)
1. 会費収入	5,202,668	1. 事業費	8,065,073
正会員	4,622,000	1.1. 出版費	6,579,683
学生会員	130,000	会誌印刷	900,000
賛助会員	300,668	編集費	585,390
外国会員	150,000	発送費	250,000
		1.2. 行事費	250,000
2. 入会金収入	28,000	1.3. 名簿積立	250,000
3. 刊行物売上	3,528,930	1.4. 事務委託費	1,360,576
Back No.	3,004,050	1.5. 会員業務郵税	179,380
別刷	524,880	-----	-----
4. 広告料	0	1. 事業費合計	10,105,029
5. 助成金	1,610,000	2. 管理費	300,000
6. 寄付	300,000	2.1. 庶務費	129,123
7. 雑収入	88,874	2.2. 会議費	11,840
8. 差額調整金	1,417,861	2.3. 通信費	543,300
9. 前年度繰越金	4,077,813	2.4. 旅費	106,135
計	16,254,146	2.5. 雑費	-----
		2. 管理費合計	1,090,398
		3. 次期繰越金	5,058,719
		計	16,254,146

2) 貸借対照表

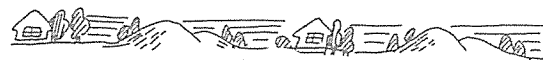
(1982年12月31日現在)

資産の部		負債・正味財産の部	
科 目	金額(円)	科 目	金額(円)
現金	6,040	負債の部	
預金	4,392,148	未払金	923,800
学会事務センター預け金	2,479,331	前受会費	645,000
		名簿作成積立金	250,000
		-----	-----
		負債の部合計	1,818,800
		正味財産の部	
		剰余金	5,058,719
		-----	-----
		正味財産の部合計	5,058,719
資産の部合計	6,877,519	負債・正味財産の部合計	6,877,519

差額調整金について

1982年度の決算報告の1)収支決算書の収入の部にあります差額調整金(1,417,861円)については、その後関係者により慎重に検討し、この結果を12月17日の評議員会で報告し、了承されたことを御報告します。

監事 島居鉄也



1983年度 事業中間報告(1983年9月30日現在)

1. 会員現況(1983年8月末現在)

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1982年12月末	858	12	3	873
入会	16	0	0	16
退会	10	0	1(逝去)	11
1983年8月末	864	12	2	878
2. 年会、委員会開催数				
年会1回(10/17-19、東京)、総会1回(10/18、東京)、例会2回(2/12、6/11、東京)、評議員会3回(2/12、6/11、10/16)、幹事会2回(4/9、9/22、東京)、財政委員会2回、会誌編集委員会2回、ニュース発行委員会1回、行事委員会2回、選挙管理委員会2回				
3. 会誌発行				
G. J. Vol. 16(4,5,6)、Vol. 17(1,2,3) 6号				
地球化学 Vol. 16(2)、Vol. 17(1) 2号				
4. ニュース発行				
Nos. 97,98,99 (計22ページ)				
5. 学会主催、共催				
第4回水-岩石相互作用国際集会(8/29-9/3、主催)、第20回理工学における同位元素研究発表会(共催)				
6. 例会				
2/12 自然界における拡散現象				
1) 深海底堆積物 大隅多加志氏				
2) 造岩鉱物 森岡正名氏				
6/11 考古学と地球化学の接点				
1) 貝塚産貝殻の酸素同位体組成 小池裕子氏				
2) 青銅器と鉛同位体組成 馬淵久夫氏				
7. 役員選挙				

1983年度会計中間報告(1983年6月30日現在)

収入の部		
科 目	金額(円)	(予算、円)
1. 会費収入	4,465,604	(5,000,000)
2. 刊行物売上	1,621,257	(4,300,000)
3. 広告料	0	(100,000)
4. 助成金	1,560,000	(1,600,000)
5. 雑収入	46,430	(60,000)
6. 前年度名簿積立金	250,000	(250,000)
7. 前期繰越金	5,058,719	(3,000,000)
計	13,002,010	(14,310,000)

支出の部

科 目	金額(円)	(予算、円)
1. 事業費		
1.1. 出版費	3,254,194	(8,530,000)
会誌印刷	2,804,194	
編集費	450,000	
発送費	0	
1.2. 行事費	50,000	(320,000)
1.3. 名簿積立金	0	(500,000)
1.4. 事務委託費	0	(1,400,000)
1.5. 会員業務郵税	81,520	(170,000)
1. 事業費合計	3,385,714	(10,920,000)
2. 管理費		
2.1. 庶務費	150,000	(300,000)
2.2. 会議費	77,971	(250,000)
2.3. 通信費	4,300	(50,000)
2.4. 旅費	354,500	(400,000)
2.5. 雑費	2,240	(100,000)
2.6. 選挙費	0	(100,000)
2.7. 保管料	0	(171,600)
2. 管理費合計	589,011	(1,371,600)
3. 予備費	0	(2,018,400)
計	3,974,725	(14,310,000)

1984年度 事業計画

- 年会 1回
- 総会 1回
- 例会 2回
- 評議員会 3回
- 幹事会 2回
- 会誌発行 G. J. Vol. 18 (1-6号)、地球化学 Vol. 18 (1、2号)
- ニュース発行 3号 (Nos. 100、101、102)
- 学会共催
第21回理工学における同位元素研究発表会(共催)
- その他

1984年度 予算

収入の部		
科 目	金額(円)	(前年度予算案円)
1. 会費収入	5,000,000	(5,000,000)
2. 刊行物売上	4,100,000	(4,300,000)
3. 広告料	100,000	(100,000)
4. 助成金	1,600,000	(1,600,000)

5. 雑収入	60,000	[60,000]
6. 名簿積立金	500,000	[250,000]
7. 基本財産充当金	1,000,000	[0]
8. 前期繰越金	3,400,000	[3,000,000]
計	15,760,000	[14,310,000]

支出の部

科 目	金額(円)	前年度予算案(円)
1. 事業費		
1.1. 出版費	9,000,000	[8,530,000]
会誌印刷	7,400,000	
編 集 費	900,000	
発 送 費	700,000	
1.2. 行事費	320,000	[320,000]
1.3. 名簿積立金	750,000	[500,000]
1.4. 事務委託費	1,400,000	[1,400,000]
1.5. 会員業務郵税	170,000	[170,000]
1. 事業費合計	11,640,000	[10,920,000]
2. 管理費		
2.1. 庶務費	300,000	[300,000]
2.2. 会議費	200,000	[250,000]
2.3. 通信費	50,000	[50,000]
2.4. 旅 費	400,000	[400,000]
2.5. 雑 費	100,000	[100,000]
2.6. 選挙費	0	[100,000]
2.7. 保管料	187,200	[171,600]
2. 管理費合計	1,237,200	[1,371,600]
3. 基本財産充当引当金繰入	1,000,000	[0]
4. 次期繰越金	1,882,800	[2,018,400]
計	15,760,000	[14,310,000]

1984-1985年度 日本地球化学会 役員

会 長	松尾禎士
副会長	増田彰正
監 事	鳥居鉄也
評議員	安部喜也 野津憲治 半田暢彦 小椋和子 金森 悟 小倉紀雄 兼島 清 田口一雄 川辺岩夫 田中 剛 北野 康 佐藤和郎 松久幸敬 椎川 誠 中井信之 鈴木 款 中村 昇 清水 洋 能田 成 角皆静男 野崎義行 脇田 宏

お知らせ

1984年度年会は10月18～20日に名古屋大学工学部で開催されます。詳細は次号ニュース(101号)に掲載

“はじめに”

本ニュースも号を重ね、今回で100号になりました。会長をはじめ多くの方々から、学問について、あるいは会のあり方について寄稿をいただきました。紙面の都合で今回その全部を掲載できなかったことをおわび致します。今後とも、学会あるいは学問に関する記事や御意見をお寄せ下さい。本ニュースは年3回(大体5月、9月、1月)発行されます。原稿は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次号(101号)は4月15日〆切、5月上旬発行の予定です。このニュースが次の世紀の“はじめに”役立てればと思います。 ———— ニュース編集係 ————

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒350 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 企画室
電話 0298(54)3572

発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 101

1984. V. 14

1984年度年会は名古屋大学で開催

日 時 10月18日(木)～20日(土)
会 場 名古屋大学工学部(名古屋市千種区不老町)
内 容 一般講演、課題講演および特別講演
課題講演のテーマは、下記2課題のほか、公募します。
課題1 河口域の地球化学
コンビーナー 北野 康(名大)
課題2 海洋の粒子と堆積物の地球化学
コンビーナー 半田暢彦(名大)
懇親会 10月19日(金)18時から名古屋大学南部食堂にて。会費4,000円(学生2,000円)

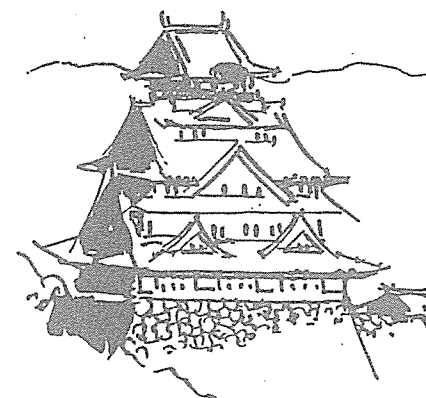
申込先および連絡先 〒464 名古屋市千種区不老町
名古屋大学・水圏科学研究所内
1984年度日本地球化学会年会準備委員会
委員長 半田暢彦
電話 052(781)5111, 内線 5720、5722
郵便振替 名古屋 5-51713
1984年度日本地球化学会年会

年会は日本地球化学会の主催、日本化学会の共催です。

6 月 例 会

講演および公募課題申込締切 6月23日(土)
申込受付け次第、講演要旨用原稿用紙を送付します。
講演要旨原稿締切 8月18日(土)
要旨集、懇親会および小集会申込締切 9月15日(土)
以上の申込には、必ず所定の用紙を用いて下さい。
所定の用紙のない場合はご請求下さい。また、要旨集代、懇親会費は9月15日までに御送金下さい。

珪酸塩の地球化学における最大の関心事の1つである液相不混和領域における元素の分配についての講演会です。多数の御参加をお待ちしております。
時：6月16日(土) 午後2時～4時
所：東京大学理学部化学教室本館4階講義室
1) 珪酸塩メルト間の元素の分配
氏家 治 (地質調査所)
2) 珪酸塩メルトと流体相間の元素の分配
浦辺徹郎 (東大理学部)



最近の公害研究と地球化学について

工業技術院産業公害研究調整官付 坂口正之

通商産業省工業技術院では、ディーゼル機関からの窒素酸化物やススの排出抑制の研究や排水中のリン、窒素の除去技術の研究など発生源対策技術を中心に、多数の公害防止のための研究を実施している。

最近の公害を見たとき、これまでの硫黄酸化物等による大気汚染、BOD、重金属等による水質汚染などは、以前に比べ格段の改善がなされており、早急な研究が必要な公害防止技術は減少しつつあるようにも感じられる。確かに、最近、公害と名のつくものの中には、カラオケ騒音公害、あき缶公害、ハトのフン公害など公害がモラルの問題か判断しかねるものが報道されたりしていることから、重大な公害問題が減少していることが予想される。

それでは、今後公害研究となるような課題は、少ないのであるかと考えると、そうでもないであろう。大気汚染では、環境中窒素酸化物濃度は、依然横ばい傾向であり、また、浮遊粒子状物質の環境基準達成率は40%程度と低い状況にある。水質汚染では、閉鎖性水域のリン、窒素による富栄養化問題など残された研究課題も少なくない。これらとは別に、これまであまり予想し得なかった新たな公害が起りつつある。それは、北海道、東北地域等で重大な社会問題となっているスパイクタイヤによる粉じん公害や水銀電池の焼却によるゴミ焼却場排ガス中の水銀含有問題などである。さらに、地球的規模の環境問題が注目されており、大気中の炭酸ガスの増加に伴う気候変動、フロンによるオゾン層の破壊、酸性雨問題などが議論され、研究も始められている。

このように見てみると、これまで、公害問題が騒がれるようになってから、20年以上の産学官一体となった公害防止のための研究や設備投資の結果、防止技術の開発が困難な課題が残され、また、炭酸ガスの増加問題など単に一研究所だけでは解明しきれないような大規模な研究課題が現われつつあることがうかがえる。

公害と地球化学との関係を考えてとき、重要なことは、地球科学的試料は、過去を語ってくれる数少ない貴重な試料であるということである。工業技術院所属の地質研究所の研究によれば、東京湾の汚染は堆積物に時代順によく保存され、また、霞ヶ浦の汚染が進行し始めたのは、海灣的な水理環境から閉鎖的な淡水湖に変化し始めた200年程度前からであることが湖沼底質の分析結果から明らかになっている。また、炭酸塩の時代的な変化を調べることで過去の水組成の変

遷が知られ、南極の水を分析することにより、同じく過去の大気汚染が把握できると聞いている。

地球的規模の環境汚染が問われたとき、地球全体が汚染され始めているわけであり、これまでの様な非汚染地域との比較分析が困難な場合もあるだろうし、なにより、過去からの変遷を知ることが重要となるであろう。その意味において地球科学的試料は公害汚染進行の解明に資する大切な試料である。

万葉集の中に瀬戸内海の赤潮らしきことを歌った歌があるとか聞いたことがある。本当に万葉の時代に赤潮が発生していたのであろうか。その内、瀬戸内海の底質の中からその時代の赤潮の痕跡が見つかるかもしれない。何か、万葉時代へのロマンが惹き起こされ、丘の上から瀬戸内海の赤潮を眺めて立つ歌人が目に浮かぶようである。

今後は、公害研究の上で、地球化学的な観点からの研究は増々重要な位置を占めることとなるであろうし、さらに、発展されることを期待している。

将来計画委員会（仮称）より

角皆静男（北大・水産学部）

2月の評議会において今期、将来計画委員会（仮称）が置かれることになり、私がその世話役となりました。今期は、これを単なるプランづくりの委員会ではなく、「地球化学（会）の将来に向けて我々は今何をなすべきか」ということで、小さくても実行できることを一つでも二つでもやろうと考えております。その結果、会員の皆様に良くて悪くても日本の地球化学（会）についてのインパクトを与えられれば成功と考えております。

したがって、○全会員をこの委員会の委員と考え、○積極的に提案や発言をしたい人が世話人となって働きかけ、○委員会は、世話人からの提案の賛同者を募り、できるだけ実行の手助けをする、という開いた委員会にするつもりです。この委員会に関心をお持ちの方、何か提案されたい方、ご意見のある方は是非ご連絡下さい。まとめて世話人間のニュースとして流し、その実現を図るつもりです。

とりあげてもよさそうな問題の具体例と現在すでに企画中のものを以下にあげておきます。

I 学会および会員内の問題として

1 地球化学会の発展のために

○会員数の増加（高校、学生、周辺領域）

〔和文誌「地球化学」の改革によってという提案があります〕。

○学会の財政的基盤の確立〔会員数が200名増加すると当面の会費値上げは回避できそうです〕。

○学会の地位、評価の向上

2 会員の直接的利益のために

○研究費（特定研究、総合研究A・Bなど）

○GJなど会誌の評価の向上

○学生会員の進路の開拓

3 会員内の諸問題

○情報・意見交換のための新聞の発行〔北大水産学部の会員により、海洋科学ニュースの発行が計画されています。他分野で発行を引受けてくださる方を探しています〕。

○地球化学の体系化と年会等の充実〔今年の年会からプログラムに分野名をつけたらという提案があります〕。

○部会的研究グループの活動

○シンポジウムなどの開催〔年会の際にこの委員会活動に関するシンポジウムを計画しています。また、会員に対するアンケート調査も考えられています〕。

II 上部的組織に対して

○文部省など行政機関

○学術会議

○国際的機関

III 学生・社会に対して

1 書物の発行

○教科書

○一般書〔地球化学の一般的啓蒙のため「○○の化学」シリーズの発行を考えています。執筆者をご推薦ください〕。

○専門書

2 講義

○大学における地球化学

○高校における理科Iなど

3 講演会・講習会など

4 マスコミ対策

詳しい説明は省略しましたので、ご質問等ありましたら遠慮なくお寄せ下さい。この委員会に対する皆様のご協力お願い申し上げます。

1984年度学術賞「地球化学研究協会・三宅賞」および研究助成金（若手研究者）

地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に毎年贈呈されている三宅賞の受賞候補者の推薦依頼、および今年度からあらたに地球化学に従事する若手研究者で海外シンポジウム等に出席し、論文を発表する者に対する助成金受領者の推薦依頼がありました。

研究助成金は1件10万円で年に3件、〆切日において35才以下の対象者に与えられます。〆切日は、三宅賞、研究助成金ともに1984年9月1日です。詳細は地球化学研究協会（〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話 03-330-2455）へおたずね下さい。

1985年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」

猿橋賞の受賞候補者推薦の依頼がありました。本賞は自然科学の分野で顕著な業績をおさめた女性科学者（推薦〆切日で50才未満）に贈呈されます。推薦の〆切りは、1984年11月末日（到着）です。

詳細は、女性科学者に明るい未来をの会（〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話 03-330-2455）へおたずね下さい。



日本学術会議 地球化学・宇宙化学研究連絡会

（第12期・第5回）より

昭和58年6月13日（月）午後上記会合が行われた。

出席者 11名

報告事項

i) 国際研究集会派遣について

ii) 第4回水一岩石相互作用国際会議について

8月30日から9月3日まで鳥取県三朝町で会議を行う。4月30日が申込み〆切りであったが遅れたものもあり、6月10日現在出席予定者250名、外国人140~150名、同伴者36名、発表論文130+α、会場を2つとした。予稿集は作るが発表論文集は作らず、Chemical Geologyに特集号を作る。総費用1,500~1,600万円、参加費と援助寄付金でまかなう。

前後して開く予定のIAGC Council Meetingは東京で開くこととした。

iii) 隕石学会年会

9月7・8日マインツで開催、IAGCと共催。

iv) 第27回 IGC

1984年8月4～14日 モスコで開催

v) IAGC の Council Member の交代

IAGC の Secretary の Deutsch から Nominating Committee に Council Member についての意見を出してほしい旨、本委員会に連絡があった。出席委員の多くからは、本田委員長が増田委員の意見を聞いてから処置するよう希望された。

vi) 学術会議改革案について

学術会議の会長が交代し、新会長の声明が各委員に配布された。国会では継続審議となっている。この経緯についての説明があった。

審議事項

i) 年代測定問題小委員会

5月7日に最初の会合、来年度への概算要求として年代測定センター（仮称）は山形大学と神戸大学から出ている。

地球化学・宇宙化学研連として何をすべきか、何が有効かについて多くの意見が出された。地質研連の年代小委員会には本田委員長より書面で協力を申し入れることになった。

ii) アイソトープ放射線利用に関する将来計画及び大学関係原子力研究将来計画について説明があった。

iii) 地球化学将来計画

特定研究の設立準備の総合研究B「地球表層における炭素の動態に関する研究」は、本年は採択にならなかった。近年、各所で研究所の統廃合が行われていることが多くの委員から述べられ、地球化学分野でも将来の発展を留意して考えるべきだとの意見が多かった。

iv) Recent Progress of National Sciences in Japan の件について、1985年又は1986年に地球化学の番がまわってくるので準備が必要であるとの発言があった。

1983年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1983年10月16日 19時10分～21時20分

場所：大学セミナーハウス（八王子）

出席者：北野康会長、松尾禎士副会長、一國雅巳、小椋和子、小倉紀雄、兼島清、酒井均、椎川誠、杉崎隆一、杉村行勇、田中剛、角皆静男、野津憲治、半田暢彦、増田彰正、松本英二、馬淵久夫、水谷義彦、各評議員

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告

1. 幹事会（半田評議員）

第22回幹事会を9月22日に開催した。

○学術会議会員候補の秋山雅彦、黒田吉益、

藤永太郎、猿橋勝子の4氏より推薦依頼があり、承諾書を出した。

○汎太平洋化学会議のシンポジウムの課題について報告があった。

2. 会計（小椋評議員）

国際年代学会からの委託金600万円を200万円ずつに三等分し定期預金とした。

3. ニュース発行委員会（田中評議員）

99号を8月末に年会プログラム主体で発行した。

4. 編集委員会

○G. J.（一國評議員）

Vol.17 No.2 発行した。

No.3 10月中旬に発行予定。

No.4 初校完了。

No.5,6 原稿がそろっている。

○地球化学（小倉評議員）

Vol.17 No.1 発行した。

No.2 原稿4編あり。

5. 第4回水-岩石相互作用国際集會について（酒井評議員）

○8月29日～9月3日に開催された表記国際集會の内容について説明があり、本学会への感謝の意が表わされた。

○Abstract 集を発行した。

○論文集が Chemical Geology の Special Issue (Editor 北野康) として発行される。

6. IAGC Council Meeting（増田評議員）

8月26日～28日に東京で開催した。

○学会誌として Chemical Geology を考える。

○国際的なトレーニングセンターについて検討した。

7. 役員選挙について（馬淵評議員）

1984、1985年度役員選挙の結果について、選挙管理委員長より報告があった。

III. 議事

1. 1984、1985年度役員選挙について

選挙管理委員会から報告のあった選挙結果を了承した。

2. 総会について

総会の式次第を決定した。

3. 1982年度事業報告、1983年度事業中間報告、1984年度事業計画について

半田庶務幹事より説明があり、了承した。

4. 1982年度決算報告、1983年度会計中間報告、1984年度予算案について

小椋会計幹事より説明があり、①1982年度決算

において1,417,861円の差額調整金を計上し、その差額の原因を11月末までに究明すること。

②以前積立てていた寄付金70万円と1982年度寄付金30万円の計100万円を1984年度予算から基本財産充当引当金として計上することとし、了承した。

5. 1984年度年会について

1984年度年会を名古屋大学にお願いすることにし、10月18日～20日に名古屋大学工学部にて開催することとした。

6. その他

○JSC 改革案について

JSC 改革案に対する本学会の対処の仕方について幹事会で検討した結果、もうしばらく様子を見ることにし、今すぐには声明などを出さないことにしたと報告があり、これを了承した。

○別刷代値上げについて

幹事会で検討し、今評議員会へ提案することになっていたが、幹事会で検討しなかった。

○寄贈図書取り扱いについて

今回の新旧合同評議員会に諮ることにした。

1983年度第4回日本地球化学会新旧合同評議員会議事録

日時：1983年12月17日 17時～19時

場所：番町共済会館

出席者：＊北野康会長、◎松尾禎士副会長、＊安部喜也 一國雅巳、＊小椋和子、＊川辺岩夫、桑本融 ＊佐藤和郎、＊椎川誠、＊清水洋、杉村行勇 ＊鈴木款、＊田中剛、＊能田成、＊野津憲治 ○増田彰正、＊松久幸敬、＊脇田宏、＊兼島清 加藤喜久雄 各評議員 ◎新会長 ○新副会長 ＊新評議員

1. 前回の議事録を承認した。

2. 報告

1) 1983年度年会の決算報告（小椋評議員）

配布資料にもとづき説明があった。

2) 庶務委員会（北野会長）

学術会議会員候補に推薦した4氏より、選挙が実施されなくなったが、推薦に感謝の意が表された。

学術会議より1985年度科学研究費特定研究の課題申請の要請があった。

3) 編集委員会（一國評議員）

G.J. Vol.17 No.4 発行した。

No.5 年内に発行予定。

No.6 1月中旬に発行予定。

地球化学 Vol.17 No.2 2月中に発行予定。

4) 地球化学会記念事業について（松尾会長）

1953年に地球化学研究会が発足、1963年に学会と改称した。本年が20周年であったが、すぎてしまったので、25周年記念事業を行うか、1984年度中に検討したらどうかとの提案があった。

3. 議題

1) 差額調整金について

小椋会計幹事より、1,417,861円の差額調整金発生の説明があり、了承した。なお、調査に協力頂いた会計士に5万円の謝礼を出すこととした。

2) 1984年度年会について

20周年としての記念行事は考えないで、例年通りに行うこととした。

3) 寄贈図書の取り扱いについて

次の評議員会にはかられるよう庶務幹事が引き継ぐこと。

4) 入退会について

武藤 覚会員が死去された。名誉会員の名前を名簿に死去後も残すかどうか検討することとした。

5) IGCについて

田中評議員より IGC 日本開催について本会の意見を出したいと発言があり、検討していくことにした。

○会員現況

逝去

増田康之会員、武藤 覚会員、牧 真一会員、酒井軍治郎会員が逝去されました。謹んで御冥福をお祈りいたします。

新入会員（1983年9月～12月）

竹内真二（石油資源開発㈱） 190-11 東京都西多摩郡羽村町緑ヶ丘3-5-5

近藤秀治（北海道公害防止研究所） 060 札幌市北区北19西12

木島宣明（岡山大学温泉研究所） 682-02 鳥取県東伯郡三朝町山田827

三好 正（大阪市立大学理学部） 558 大阪市住吉区杉本3-3-138

荻野 健（新潟大学理学部） 950-21 新潟市五十嵐二ノ町8050

塚田祥文（国立公衆衛生院）（自）141 品川区西五反田5-28-17 国立公衆衛生院寄宿舍

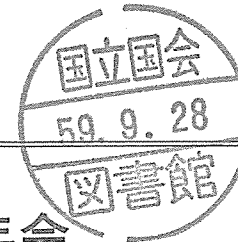
松本 良（東京大学理学部） 113 文京区本郷7-3-1

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 102

1984. IX. 10



1984 年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日時 10月18日(木)～20日(土)

会場 名古屋大学工学部7号館(名古屋市千種区不老町)

大会準備委員会 名古屋大学水圏科学研究所 半田暢彦

(名古屋市千種区不老町) 電話 052(781)5111 内線5720

	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
18日 (木)	A	受 付	一 般 講 演			課 題 講 演 II (海洋の粒子と堆積物の地球化学)					
	B		一 般 講 演			一 般 講 演					
	C		一 般 講 演			一 般 講 演					
	D		一 般 講 演			一 般 講 演					
19日 (金)	A		一 般 講 演			シンポジウム		総会	特別 講演	懇親会 (南部食堂)	
	B		一 般 講 演								
	C		一 般 講 演								
	D		一 般 講 演								
20日 (土)	A		一 般 講 演			課 題 講 演 I (河口域の地球化学)					
	B		一 般 講 演			一 般 講 演					
	C		一 般 講 演			一 般 講 演					
	D		一 般 講 演			一 般 講 演					

講演時間：一般講演は討論を含めて15分、課題講演はコンビーナーの指示による。

懇親会：10月19日(金) 18時より南部食堂にて行なう。

会費 4,000円(学生 2,000円)

ご案内：将来計画委員会談話会(公開)「地球化学の研究と教育の現状と問題点」

10月20日 17:00-20:00 水圏科学研究所会議室

話題提供：松尾禎士、増田彰正

森永茂生(東京都立大学理学部) 158 世田谷区深沢
2-1-1

三田 勲(日本天然瓦斯興業㈱) (自)299-42 千葉県
長生郡白子町剱金2212-59

岸 政美(北海道工業大学教養部) 061-24 札幌市西
区手稲前田419-2

新垣 武(沖縄県企画開発部) 900 那覇市泉崎1-
2-32

西川賢之(神戸大学理学部) 657 神戸市灘区六甲台
町1-1

岡野 修(神戸大学自然科学研究科) 657 神戸市灘
区六甲台町1-1

福本浩敏(神戸大学理学部) 657 神戸市灘区六甲台
町1-1

三澤啓司(神戸大学理学部) 657 神戸市灘区六甲台
町1-1

中山朋子(神戸大学理学部) 657 神戸市灘区六甲台
町1-1

住所等変更 (1983年9月～12月)

藤永太一郎(奈良教育大学) 630 奈良市高畑町

平良初男(琉球大学理学部) 903-01 沖縄県中頭郡西
原町千原1

大沼晃助(東北大学理学部) 980 仙台市花巻字青葉

高田利彦(自)525 草津市渋川2-8-7

能田 成(京都産業大学教養部) 603 京都市北区上
賀茂本山

高江洲瑩(自)201 狛江市駒井町1-5-15

退会

牧 真一(逝去)、酒井軍治郎(逝去)、呂 俊民、

手塚 童、馬越由美、林 孝和、松岡 清、大和田 守

昭和59年度学会開催予定

5月

15～17 火山学会 地質調査所

22 日本分光学会 国立教育会館

24 日本地下水学会 平河町都市センター

25 日本応用地質学会 大手町 日経ホール

23～25 石油技術協会 秋田大学

6月

24 古生物学会 北海道大学

7月

2～4 理工学における

同位元素研究発表会 国立教育会館

26～27 日本分析学会 室蘭工大

8月

1～4 第4紀学会 学習院大学

未定 日本温泉科学会 岡山県 奥津温泉

9月

26～28 日本陸水学会 筑波大学

26～28 X線分析討論会 関西大学会館

10月

2～3 三鉱学会 愛媛大学

2～3 放射線化学討論会 東京工業大学

3～5 放射化学討論会 甲南大学

10～14 日本分析化学会 名古屋大学 教養部

11～13 地震学会 神戸大学

16～18 日本粘土学会 仙台戦災復興記念館

18～20 日本地球化学会 名古屋大学 工学部

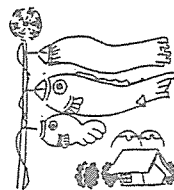
26 日本地下水学会 大津市

30～11/1 日本雪氷学会 京大会館

未定 日本火山学会 東北大学

11月

28～30 高圧討論会 筑波大学



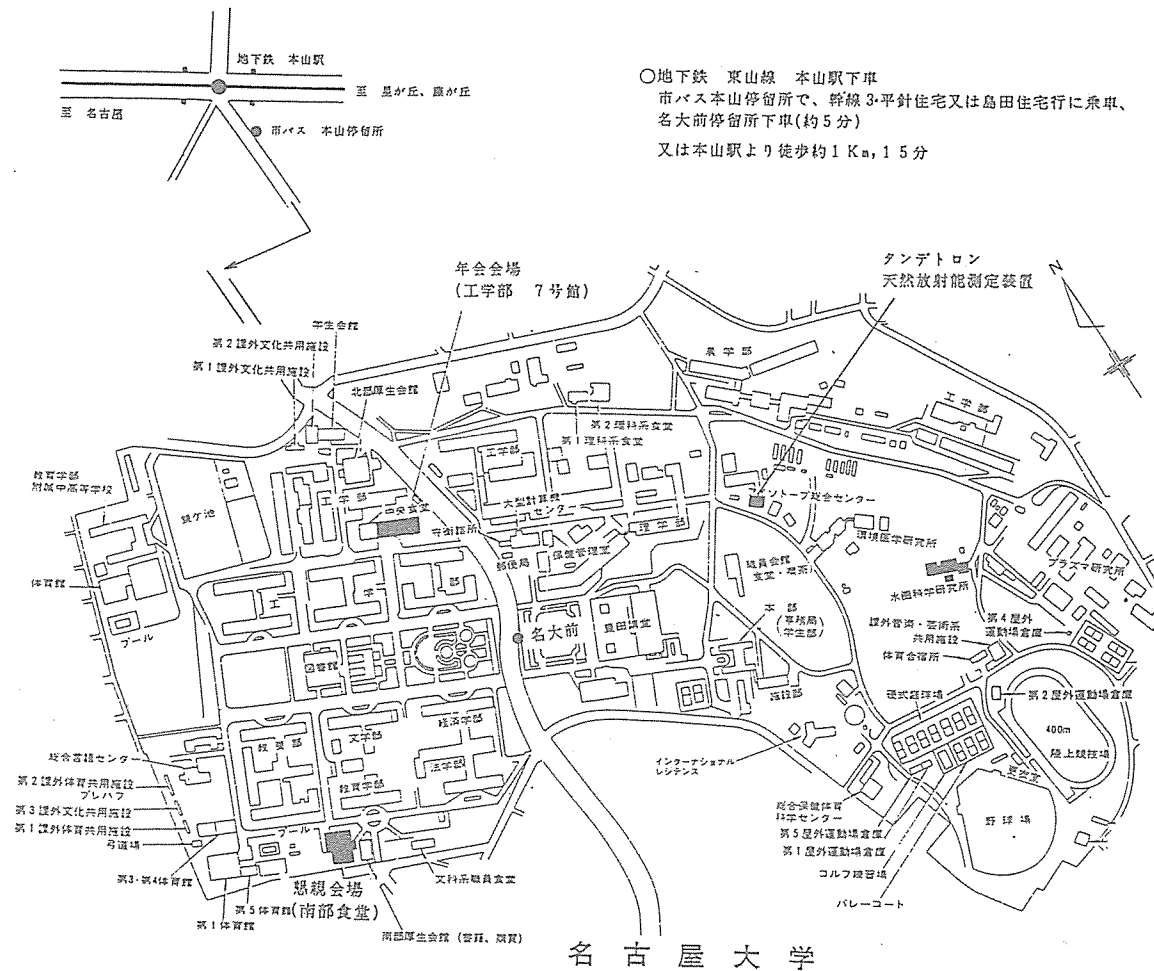
こいのぼりが空にある内にお届けしたいと思ってい
ましたが、遅くなってしまいました。お詫び致します。
これからも学会あるいは学問に関する記事や御意見を
お寄せ下さい。本ニュースは年3回(大体5月、9月、
1月)発行されます。原稿は横書き1行24字(用紙は
自由)にて書いていただければ助かります。次号(102
号)は8月10日〆切、9月上旬発行の予定です。

—ニュース編集係—

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 企画室
電話 0298(54)3572

発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

年会会場案内図



第1日 10月18日 (木)

A会場

一般講演 (9:30~10:15) 座長 平木敬三

- 1 A01 北太平洋西部における大気、海洋中二酸化炭素分圧 (気象研) 伏見克彦
- 1 A02 マリアナ海盆底層水の ^{14}C 年代と底層水の循環について (東大海洋研・東大理) ○蒲生俊敬・堀部純男・小林裕美
- 1 A03 北西太平洋表面海水の $^{228}\text{Ra}/^{226}\text{Ra}$ について (東大海洋研) 野崎義行○山田正俊・梁 漢燮・遠藤圭子

(10:15~11:00) 座長 小倉紀雄

- 1 A04 深海における重金属の分布 (名大水圏研・室蘭工大・広大総合科学) ○金森 悟・室住正世・坪田博行
- 1 A05 深海における重金属と栄養塩の関連について (名大水圏研・室蘭工大・広大総合科学) ○金森 悟・室住正世・坪田博行
- 1 A06 キレート樹脂を用いる錯化容量の測定について (東海大海洋) 廣田 致○松村 徹

(11:00~12:00) 座長 吉田尚弘

- 1 A07 天然水中の有機態金属元素の状態に関する研究 (近畿大理工・近畿大教養) ○中口譲・平木敬三・重松恒信
- 1 A08 海水中の有機金属錯体の生態学的役割について (気象研) ○廣瀬勝己・杉村行勇
- 1 A09 海洋における水銀収支の新らしい見方 (気象研) ○鈴木 款・杉村行勇
- 1 A10 北太平洋西部海域の高分子窒素化合物の分布 (気象研) ○杉村行勇・鈴木 款

課題講演II [海洋の粒子と堆積物の地球化学]

コンビーナー 半田暢彦

(13:00~14:25) 座長 野崎義行

- 1 A11 海洋における沈降粒子束の地域的、鉛直的、時間的変動 (北大水産) ○角皆静男・乗木新一郎・原田 晃・石森則人
- 1 A12 南極海における沈降粒子の化学組成 (北大水産) 乗木新一郎○黒崎太郎・原田 晃・角皆静男
- 1 A13 沈降粒子と懸濁粒子の主成分および重金属濃度の比較検討 (北大水産) ○乗木新一郎・石森則人・角皆静男
- 1 A14 海洋と粒子中の重金属の分配率と深度変化の測定例 (室蘭工大・広大総合科学・東海大海洋) 室住正世○中村精次・横山裕之・茶木一寿・坪田博行・豊田恵聖

(14:25~15:55) 座長 松永捷司

- 1 A15 海水からの放射性核種の除去過程 (東大海洋研) 野崎義行
- 1 A16 沈降粒子中の放射性核種からみた南極海における物質除去過程 (北大水産) ○原田 晃・角皆静男
- 1 A17 沈降粒子を構成する有機物の起源 (名大水圏研) ○松枝秀和・半田暢彦
- 1 A18 海洋における沈降粒子有機物の熱分解ガスクロマトグラフィー (都立大理) ○山本修一・石渡良志

(16:00~17:20) 座長 乗木新一郎

- 1 A19 沿岸海域における核酸塩基類の動態 (香川大農) ○門谷 茂・多田邦尚
- 1 A20 伊勢湾の表層堆積物における多環芳香族炭化水素と粒子サイズ (名大水圏研) ○佐藤茂之・半田暢彦・松永捷司
- 1 A21 堆積粒子と間隙水における海底下の地球化学—I (DSDP Leg96, ミシシッピファン) (地調・東大海洋研・東洋大・Hamburg大) ○川幡穂高・石塚明男・青木三郎・V. Ittekkote・E. Degens
- 1 A22 堆積粒子と間隙水における海底下の地球化学—II (DSDP Leg 96) (東大海洋研・地調・東洋大・Hamburg大) ○石塚明男・川幡穂高・青木三郎・V. Ittekkote・E. Degens

B会場

一般講演 (9:30~10:30) 座長 井上久幸

- 1 B01 N_2O の地球化学的循環—海洋を含む三圈モデル—(富山大理) 吉田尚弘
- 1 B02 大気中における CF_2Cl_2 , CFCl_3 および N_2O の分布 (気象研) ○広田道夫・村松久史・牧野行雄・佐々木徹
- 1 B03 大気清浄地域の地表付近におけるオゾンとベリリウム-7濃度の関係 (新潟県公害研) ○福岡紀夫・市川義夫・鈴木 修・南 忠員
- 1 B04 日本における地表大気中の ^{85}Kr 濃度について (気象研) ○鈴木 款・井上久幸・葛城幸雄・杉村行勇

(10:45~12:00) 座長 中谷 周

- 1 B05 筑波における表面大気中の CO_2 炭素安定同位体比について (気象研) ○井上久幸・杉村行勇
- 1 B06 洋上大気中の CO_2 炭素安定同位体比について (気象研) ○井上久幸・杉村行勇
- 1 B07 大気中 CO_2 炭素同位体比測定のためのガスク

- ロマトグラフィーによる CO₂ と N₂O の分離
(東大海洋研・東京理大) ○蒲生俊敬・堀部純男・佐藤雅彦
- 1 B08 地表付近における大気中二酸化炭素の含量
(その3) (気象研) 伏見克彦
- 1 B09 黄砂現象による大気中のエアロゾル化学組成
の変化について (慶大理工) ○田中 茂・
田島将典・橋本芳一
(13:00~14:15) 座長 鈴木 款
- 1 B10 エアロゾル中の化学成分の経時変化とその起
源 (弘前大理) ○中谷 周・栗林鉄治
- 1 B11 府中市における大気中のエアロゾル濃度 (東
農工大農) ○大久保淳子・小倉紀雄
- 1 B12 西部北太平洋域への²¹⁰Pb 降下量の季節的, 地
域的変動 (北大水産) 角皆静男○横田喜
一郎・倉田隆喜
- 1 B13 西部北太平洋域におけるエアロゾル中の Ca
/Al について (北大水産) ○鈴木利孝・
角皆静男
- 1 B14 大気中の微量必須金属元素に関する研究
(近畿大理工・近畿大教養) 中口 譲○森
田道隆・平木敏三・重松恒信
(14:30~15:30) 座長 伏見克彦
- 1 B15 降水中の粒子とその含有成分の変動 (国立
公害研) ○安部喜也・西川雅高
- 1 B16 府中市における降水の化学成分濃度の経年変
化 — pH 規定因子について (東農工大農)
○丹野忠弘・小倉紀雄
- 1 B17 浦和における降水化学成分と大気粒子状物質
について (その2) (埼玉大工) 君島克
憲○仲本正彦・小沢竹二郎
- 1 B18 日本各地における硫酸塩の降下量の季節的変
動 (北大水産) ○角皆静男・植田浩之・
鈴木利孝・品川高儀
(15:30~16:15) 座長 蒲生俊敬
- 1 B19 雨水中の亜硫酸の酸化速度について (慶大
理工) ○田中 茂・佐藤 滋・橋本芳一
- 1 B20 雨および雪の PH と水質の関係 — 1983年
7月~1984年5月の札幌市中央区の一例
(北海道工大教養) ○渡辺紀元・岸 政美・
早川 修
- 1 B21 降雪の化学成分の地点・経日変動 (新潟県
公害研・新潟県生活環境部) ○福岡紀夫・
漆山佳雄・大泉毅・市川義夫・中野雅夫・貴
船育英
- C会場
一般講演 (9:30~10:30) 座長 日下部実
- 1 C01 Pyrite - pyrrhotite - magnetite - H₂O 系の実
験的研究 (岡山大温研) 木島宣明
- 1 C02 200~300°C における長石 — 石英系ガラス
と (Na, K) Cl, CaCl₂ 水溶液のイオン交換反
応 (東大理) ○白木亮司・飯山敏道
- 1 C03 酸性溶液による岩石成分の溶出変化 (東邦
大理) ○岡村 忍・吉池雄蔵・大森禎子・
岩崎岩次
- 1 C04 硫化鉱物の熱水反応, FeS₂ - ZnS 系 (函館
工専・Penn State) ○水上正勝・大本 洋
(10:45~12:00) 座長 木島宣明
- 1 C05 日本の熱水卓越系における Li, Cs の分布と
挙動 (地調) 阿部喜久男○茂野 博
- 1 C06 食塩泉の成因と化学成分との関係 (東邦大)
○高松信樹・上村京子・今橋正征
- 1 C07 アルミニウム存在下におけるケイ酸の重合
(九大理) ○山中千穂・横山拓史・樽谷俊
和
- 1 C08 熱水条件下におけるホウケイサン塩ガラスの
挙動 (東大海洋研) ○柳沢文孝・酒井 均
- 1 C09 地熱熱水からのケイ酸質沈殿物の生成に関す
る研究 (九大理) ○木付晴美・横山拓史・
樽谷俊和
(13:00~14:00) 座長 高野穆一郎
- 1 C10 含水鉱物の重水素濃度分配係数について
(東大海洋研) 堤 真
- 1 C11 熱水条件下における H₂S - S₂O₃²⁻ - S₂O₄²⁻ 系の
硫黄同位体交換反応 (岡山大温研・東大海洋研)
○宇山史剛・千葉 仁・日下部実・酒井 均
- 1 C12 本邦温泉水中のホウ素同位体比と海水中のホ
ウ素同位体比との関連について (上智大理
工・東工大原子炉工学研) ○垣花秀武・野
村雅夫・岡本真実
- 1 C13 ガラパゴス海嶺 (DSDP Site504 B) 熱水変
質玄武岩の水素および酸素同位体比 (岡山
大温研・富山大理・地調) ○日下部実・菊
地美子・川幡穂高
(14:00~15:00) 座長 杉崎隆一
- 1 C14 松川地熱発電所蒸気成分の経時変化 (日本
重化学工業) 吉田 裕
- 1 C15 東北日本における火山ガスの二酸化炭素の
δ¹³C について (名大理) 清棲保弘
- 1 C16 三宅島噴火に伴う化学物質変動 (東大教養)
綿拔邦彦
- 1 C17 1983年三宅島噴火後の火山ガス成分の変化

- (東工大工・埼玉大工) ○平林順一・小坂
丈予・小沢竹二郎
(15:15~16:15) 座長 水谷義彦
- 1 C18 草津白根火山1982年以後の噴火活動と湖沼・
河川水の水質変化 (東工大工・上智大理工)
○小坂丈予・平林順一・垣花秀武・小坂知子
- 1 C19 対話型水系混合計算プログラムの開発 (地
調) 野田徹郎
- 1 C20 火口湖水中のポリチオン酸について (東大
教養) ○高野穆一郎・綿拔邦彦
- 1 C21 有馬温泉のボーリングコアに関する知見
(東大海洋研・大阪市大理) ○益田晴恵・
酒井 均・鶴巻道二
(16:15~17:00) 座長 千葉 仁
- 1 C22 日本の天然ガスの起源に関する一考察 (東
大理) ○ト部明子・富永 健・脇田 宏
- 1 C23 オマーンの酸素を主成分とする温泉ガス
(東大理・東工大理) ○ト部明子・富永
健・佐野有司・脇田 宏・牛木久雄
- 1 C24 青森県沖浦の温泉群と断層 (中央温泉研)
佐藤幸二
- D会場
一般講演 (9:30~10:30) 座長 海老原充
- 1 D01 銀河系の創生 吉岡亀太
- 1 D02 原始大気モデルガスに対する高周波放電によ
る炭化水素の合成 (自治医大) ○後藤公
彦・金城政孝・石神正浩
- 1 D03 酸素同位体比からみた鉄質球粒の酸化の場
(地調・東大宇宙線研) ○松久幸敬・山越
和雄
- 1 D04 セリウムの存在度異常を持つ月試料の
¹³⁸Ce/¹⁴²Ce 比について (地調・東大理)
○田中 剛・清水 洋・増田彰正・柴田 賢
(10:45~12:00) 座長 田中 剛
- 1 D05 炭素質いん石中の有機化合物 (東大理)
○村江達士・増田彰正・高橋武美
- 1 D06 主に Johnstown 隕石と Kapoeta 隕石 中の
REE パターンとその意義 (東大理) ○高
橋和也・清水 洋・増田彰正
- 1 D07 ユークライトの希土類元素パターンとその成
因的意義 (東大理) ○清水 洋・増田彰
正
- 1 D08 オーディナリ・コンドライト中の希土類元素
とウランの分布 (群馬大教養) 海老原充
- 1 D09 impact-melt した南極産 LL コンドライトの
Rb-Sr 系と REE 組成 (神戸大理・岡山大温
研) ○岡野 修・中村 昇・三澤啓司・本
間弘次
(13:00~14:00) 座長 福岡孝昭
- 1 D10 炭素質隕石 Belgica-7904 の希ガス同位体比
異常 (岡山理大) ○長尾敬介・井上健作・
緒方惟一
- 1 D11 Noble gases in a chondrite (山形大理)
○高岡宣雄・関井秀一
- 1 D12 深海堆積物中の希ガスの存在分布と³He/⁴He
比 (神戸大・岡山理大) 松田准一○福本
浩敏・長尾敬介
- 1 D13 Allende 隕石中の希ガス濃縮成分について
(神戸大・東大・岡山理大) ○松田准一・甘
利幸子・長尾敬介
(14:00~15:00) 座長 長尾敬介
- 1 D14 南極ヤマトポリミクトユークライト隕石中
clast の化学組成 (学習院大理) ○福岡孝
昭・上山治貴
- 1 D15 南極ヤマトポリミクトユークライト隕石の化
学組成の比較 (学習院大理) ○福岡孝昭・
鈴木栄伸
- 1 D16 微量元素からみた Allende, Hedjaz 隕石中の
コンドリュール (神戸大理) ○三澤啓司・
中村 昇
- 1 D17 仁保いん石と東公園いん石 (国立科学博物
館・理研・山形大理) ○島 正子・岡田昭
彦・高岡宣雄・村山定男
(15:15~16:15) 座長 大隅多加志
- 1 D18 ¹⁴C による南極やまと隕石の落下年代測定
(学習院大理) ○松田悦子・木越邦彦
- 1 D19 重力の下での気体の熱平衡 (学習院大理)
木越邦彦
- 1 D20 水の超臨界領域における水溶液中の塩類の熱
力学的性質 (東大理・地調) ○飯山敏道・
川幡穂高・内田悦生
- 1 D21 亜鉛バッチ法による水試料の水素化 (東工
大理) 鈴木紀夫
(16:15~17:15) 座長 川辺岩夫
- 1 D22 各種硫酸塩の結晶水と母液との間の酸素同位
体の分別係数 (東工大理) ○池田泰子・
松尾禎士
- 1 D23 同位体比質量分析計におけるゼロ点法のマイ
クロ・コンピューターを用いた改良 (東工
大理) ○田村 淳・大隅多加志
- 1 D24 水・二酸化炭素同位体交換平衡法の簡略化
(富山大理) ○吉田尚弘・水谷義彦
- 1 D25 塩類水溶液の水和圏内外の水素同位体分別と

その温度依存性 (学習院大理) 垣内正久 ○阿部健一郎		大水圏研) ○樋口敏二・徳岡敦子・渡辺興 亜	
第2日 10月19日(金)		2 B02	酸素同位体組成からみた降雪と積雪の関係 (名大水圏研) ○徳岡敦子・飯田肇・渡辺 興亜・樋口敏二
A会場		2 B03	中部地方の降雪の酸素同位体比を規制する二 因子について (名大水圏研) 加藤喜久雄
一般講演 (9:00~9:45) 座長 藤原祺多夫		2 B04	同位体組成からみたヒマラヤ、チベット高原 の雪水、天然水の由来 (名大理・京大工) 中井信之○浅野 晃・西山 孝
2 A01 亜表層において生産される懸濁粒子の有機物 組成 (名大水圏研) 浜 健夫		2 B05	南極氷床コアにおける古気温の指標としての 酸素同位体比について (名大水圏研) 加 藤喜久雄
2 A02 沿岸表層水中の溶在有機物の逆相液体クロマ トグラフィー (広大総合科学) ○早瀬光司・ 下島公紀・坪田博行			(10:30~11:30) 座長 平尾良光
2 A03 海藻の濃縮係数との相関からみた元素の海水 中における平均滞留時間値の比較 (京都教 大化) ○山本俊夫・大塚由紀子		2 B06	南極・Beacon supergroup 中の有機成分 (毛管浄化研究会・東大教養・千葉工大) ○ 松本源喜・綿抜邦彦・鳥居鉄也
(9:45~10:30) 座長 早瀬光司		2 B07	南極ライト谷における塩類の起源について (名大水圏研) ○富山千里・北野 康
2 A04 高感度・迅速なリン酸の分析法と天然水試料 への応用 (東大理) ○橋本伸哉・藤原祺 多夫・不破敬一郎		2 B08	南極ベストフォールドオアシスにおける塩湖 水の塩起因について (北大水産・弘前大理・ オーストラリア南極局・千葉工大) ○増田 宣泰・中谷 周・H. Burton・鳥居鉄也
2 A05 東京湾におけるアルカリフォスファターゼと リン酸の相関に関する研究 (東大理) ○藤原祺多夫・橋本伸哉・不破敬一郎		2 B09	南極スカレビックハルゼンのスカレン及び変 成岩の同位体地球化学的研究 (秋田大鉦 山・北大理) ○鈴木哲夫・松葉谷治・松枝 大治・本吉洋一
2 A06 深海底堆積物中の希ガス(特に ³ He/ ⁴ He比) (東大理) 高柳昌弘・小嶋 稔・座主繁男		C会場	
2 A07 深海底堆積物中の地球外起源物質 (神戸大 自然科学・東大理) ○甘利幸子・座主繁男・ 小嶋 稔・高柳昌弘		一般講演 (9:00~10:00) 座長 北 逸郎	
(10:45~11:30) 座長 川幡穂高		2 C01	岩石破壊によって生じた水素と水の水素 同位体分配比について (富山大理・名大理) 佐竹 洋・杉崎隆一
2 A08 海洋堆積物中のマイクロマンガンノジュール の化学組成 (名大理) ○大橋優喜・杉崎 隆一・鈴木和博		2 C02	府中地殻活動観測施設構内におけるラドン観 測 (国立防災セ) 吉田則夫
2 A09 マンガン団塊の化学組成 (東大理) ○豊 田和弘・中村裕二・脇田 宏		2 C03	松山に於ける地震化学観測(II), CH ₄ /Ar 比 異常について (愛媛大理) 川辺岩夫
2 A10 α/γ線スペクトロメトリーによるマンガン ノジュールの研究 (東大海洋研) ○梁 漢 燮・野崎義行		2 C04	中部地方の鉱泉ガス中のCH ₄ の同位体組成 について (富山大理) ○水谷義彦・常盤 実・佐竹 洋
シンポジウム(12:30~15:00) コンビナー 角皆静男			(10:15~11:30) 座長 吉田則夫
地球化学の将来に向って我々は今何をなすべきか		2 C05	大気中のヘリウムの source と sink (東大 理) ○佐野有司・脇田 宏
総会 (15:00~16:00)		2 C06	日本列島におけるヘリウム同位体比の分布と テクトニクス (東大理) ○佐野有司・脇 田 宏
特別講演 (16:00~17:00) 座長 北野 康		2 C07	秋田県泥湯地域を試錐コア中の方解石脈の酸
古文化財の化学 山崎一雄			
B会場			
一般講演 (9:00~10:15) 座長 松本源喜			
2 B01 降雪粒子の酸素同位体組成と降雪機構 (名			

素同位体比と流体包有物充てん温度の比較 (秋田大鉦山・東大工) ○松葉谷治・武内 寿久祐・鈴木哲夫		(10:00~11:00) 座長 坂田昌弘	
2 C08 アモルファスシリカー水間の酸素同位体分別 (秋田大鉦山・九大生産研) ○北 逸郎・ 田口幸洋・松葉谷治		3 A05	大気中の粒子状水銀濃度 (千葉大理) 中 川良三
2 C09 火山ガラス中の水の水素同位体比について (秋田大鉦山・室蘭工大) ○松葉谷治・白 幡浩志		3 A06	東京における降雪(1984年)の主要イオン組 成 (電力中研) ○寺田信之・藤田慎一・ 山際晶子
D会場		3 A07	LASの行動を支配する自然・社会科学的両因 子の解析 (MV研) 半谷高久
一般講演 (9:00~9:45) 座長 野津憲治		3 A08	都市水域におけるアルキルベンゼン VI-直 鎖アルキルベンゼンスルホン酸塩(LAS)の 挙動との比較 (都立大理) ○高田秀重・ 石渡良志
2 D01 鉛同位体比による飛鳥水時計銅管の産地推定 (国立文化財研・青山学院大理工) ○馬淵 久夫・平尾良光			(11:00~12:00) 座長 鶴見 実
2 D02 須恵器, および粘土からみた東日本と西日本 (奈良教大) ○三辻利一・井上晃夫・岡井 剛		3 A09	土壌による石炭灰溶出水の中和 (電力中研) 坂田昌弘
2 D03 花崗岩の地球化学(第1報) 東日本と西日本 の花崗岩 (奈良教大・島根大理) ○三辻 利一・辻本秀明・上田信夫・伊藤晴明・時枝 克安		3 A10	アワビ貝殻における鉛およびアルカリ土類元 素の分布 (青山学院大理工・東水大・名工 大) ○松本哲一・木村 幹・前田 勝・飯 田忠三・内田哲男・平尾良光・山川 紘・森 田良美・小島 功
(9:45~10:30) 座長 清水 洋		3 A11	日本のバックグラウンド海域沿岸の Mussel Watch-I 主要/微量元素 (国立公害 研) ○森田昌敏・岡本研作・植弘崇嗣・柴 田康行・不破敬一郎
2 D04 ICP 発光分析による標準岩石の希土類元素の 定量一 特に JG-1 について (東大理) ○豊田和弘・原口紘丞・不破敬一郎		3 A12	東京湾堆積物中の多環芳香族炭化水素の分布 VIII, 3mおよび1.5m柱状試料の解析 (都立 大理・地調) ○尹 順子・石渡良志・松本 英二
2 D05 地質調査所岩石標準試料の化学組成 1984 (地調) ○安藤 厚・寺島 滋		課題講演 I [河口域の地球化学]	
2 D06 同位体希釈法による隕石及び標準岩石中の Hoの精密定量 (東大理) ○川上 紀・増 田彰正		コンビナー 北野 康	
第3日 10月20日(土)		(13:00~14:40) 座長 和田英太郎	
A会場		3 A13	河口附近における海水と河川水の挙動 (東 邦大医) 相川嘉正○加藤尚之・塚本邦子
一般講演 (9:00~10:00) 座長 中川良三		3 A14	太田川河口域の環境動態 (広大総合科学) ○坪田博行・林 知夫・遠藤拓郎
3 A01 高等植物からの揮発成分-II (名大水圏研) 大田啓一		3 A15	多摩川流入域における海水中の微量元素の挙 動 (東大理・広大総合科学) ○赤木 右・ 原口紘丞・坪田博行・不破敬一郎
3 A02 大気中の人類起源元素の行動をモニターする 杉の樹皮 (東工大総合理工) ○鶴見 実・ 一國雅巳		3 A16	大槌湾水系における有機物の挙動-C, N 同 位体組成の変動を中心として (三菱化成生 命研) ○和田英太郎・水谷 広・柄沢亨子・ 蒲谷裕子・南川雅男・光本昌平・辻 堯
3 A03 大気環境と植物中の硫黄の同位体比 (名大 理) ○辻 康・中井信之		3 A17	沿岸域における窒素, リンの収支 (地調) ○松本英二
3 A04 加速器質量分析による樹木の年輪の ¹⁴ C濃度 測定とその経年変動(1945-1983年) (名 大理・名大アイソトープ総合セ) 中井信之 ○木村雅也・中村俊夫・吉岡茂雄・谷口 誠			(14:55~15:55) 座長 松本英二
		3 A18	東京湾海水中的のスズの分布と形態 (気象大

- 学校) ○大山準一
- 3 A19 沿岸堆層水中の溶在有機物と重金属 (広大総合科学) ○下島公紀・早瀬光司・坪田博行
- 3 A20 河口底泥中のセレン (名古屋市公害研) ○伊藤和男
- 3 A21 能登九十九湾堆積物中の元素の分布と挙動 (金沢大理) ○竹田 剛・松本 健・寺田喜久雄
(15:55~16:55) 座長 伊藤和男
- 3 A22 港湾堆積物の化学組成—重金属を中心として— (海上保安試験研究セ) ○吉村広三・柴 多喜男・渡辺敬三
- 3 A23 内湾堆積物中の Pyrite の硫黄同位体比 (名大理) ○高橋正明・中井信之
- 3 A24 有明海の底土中のリン、窒素について (佐賀大理工・佐賀短大) ○飯盛喜代春・飯盛和代・江頭泰弘・船津丸美穂子
- 3 A25 燧灘堆積物における有機物の分解過程 (名大水圏研) ○松永捷司・半田暢彦

B会場

- 一般講演 (9:00~10:00) 座長 沢田 清
- 3 B01 炭酸カルシウムと水溶液間における銅とストロンチウムイオンの分配定数—銅とストロンチウムの共存系— (名大水圏研) ○小笠原かえで・北野 康
- 3 B02 カルサイトへのマグネシウムイオンの共沈挙動 (島根大理) ○奥村 稔
- 3 B03 カルサイトへの Mn^{2+} , Co^{2+} , Ni^{2+} の対数分配 (群馬大工) ○川本 博・辻本幸司・赤岩英夫
- 3 B04 いくつかの石灰岩中の希土類元素パターンの特徴 (東大理) ○上岡 晃・川上 紀・清水 洋・増田彰正
(10:00~11:00) 座長 相沢省一
- 3 B05 カルサイト中の格子間サイトと微量元素の分配 (三菱総合研・東工大総合理工) ○石川正道・一國雅巳
- 3 B06 Coral aragonite の calcite への変質について (愛知教大・名大水圏研) ○吉岡小夜子・北野 康・金森暢子
- 3 B07 生物性炭酸塩殻の生成機構 (名大水圏研) ○金森暢子・金森 悟
- 3 B08 炭酸カルシウムの生成機構に及ぼす温度の影響 (新潟大理) ○荻野 健・鈴木俊雄・澤田 清

- (11:00~12:00) 座長 奥村 稔
- 3 B09 $MgCO_3$ ・ $CaCO_3$ 固溶体の生成 (新潟大理・ニューヨーク州立大) ○澤田 清・G. H. Nancollas
- 3 B10 海水および汽水環境でのプロトドロマイトの合成 (琉球大理) 大森 保
- 3 B11 南大東島に分布するプロトドロマイトの生成過程と微量元素含量との関連 (群馬大工) ○相沢省一・赤岩英夫
- 3 B12 伊豆・白浜石灰岩のドロマイト化作用 (東大理) 松本 良
(13:00~14:00) 座長 佐藤 修
- 3 B13 三瓶山麓におけるトリチウム・ラドン・水質の分析による地下水循環の研究 (農水省農業土木試) 長江亮二
- 3 B14 単純モデル系における有機態金属の安定度定数 (足利工大) ○荻原俊夫・小平 潔
- 3 B15 沖縄に産する島尻層泥岩の溶出実験 (琉球大理) 前川守克○渡久山章
- 3 B16 茨城県南部における地下水中溶存ガス組成の三次元分布 (地調) 吉川清志
(14:00~14:45) 座長 大崎 進
- 3 B17 山口県秋芳台におけるカルスト地下水の水質の経年変動 (九大理) ○吉村和久・樽谷俊和
- 3 B18 新潟県下地すべり地の地下水の多様性 (新潟大積雪地域災害研) 佐藤 修
- 3 B19 相模川水系の水質 (神奈川温地研) ○鈴木孝雄・平野富雄・大木靖衛
(15:00~16:00) 座長 吉村和久
- 3 B20 河川水中の微量元素の存在状態 (都立アイソトープ総合研) ○谷崎良之・山崎正夫・永塚澄子
- 3 B21 河川水中の微量元素の平衡モデル—錯形成と吸着 (九大 RI・九大理) ○大崎 進・杉原真司・三好智子・高島良正
- 3 B22 河川の溶存物質の比フラックスと比流量との関連性 (京大防災研) ○吉岡龍馬・伊藤正明
- 3 B23 湖水中における窒素ガス代謝 (愛知学院大教養) 小山忠四郎

C会場

- 一般講演 (9:00~10:00) 座長 清棲保弘
- 3 C01 強リン酸を用いたマントル構成鉱物中の炭素物質の抽出 (東工大大理) ○石田 積・松尾禎士

地球化学研究についてのアンケート

日本地球化学会 将来計画委員会委員長 角皆静男

先のニュース(101号)でお伝えしましたように、日本地球化学会では地球化学研究の発展を促進する目的で、会の事業として地球化学の将来計画をたてることになり、地球化学将来計画委員会を発足させました。この委員会活動の基礎資料とするため、地球化学会会員を始めとする地球化学研究者の研究の現状および研究を進める上での問題点を把握したいと思っています。お手数ですが下記のアンケート(裏面も)に御記入の上、同封の封筒により10月6日までに本用紙を御返送下さい。本アンケートは地球化学会会員にお送りしましたが、会員外の地球化学研究者が本用紙のコピーにより御回答いただけますならば、それは望外の喜びであります。集計結果は本年度年会で10月20日に小集会をもち発表することと、地球化学会ニュースへの掲載を予定しております。なお、各研究・教育機関にはそれぞれ機関(部門)別に別種のアンケートを送りました。会員各位がその記入に協力を求められた折にはよろしく御配慮の程をお願い致します。

アンケート返送先

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3 工業技術院地質調査所地球化学課内

日本地球化学会 将来計画委員会 田中 剛

(0298-54-3558)

該当する所に○印又は御意見を御記入下さい。また“地球化学”については厳密な意味にとらわれず自由にお考えいただき、地球化学的要素が濃いものは含めて下さい。

- 性別: 男() 女()
- 年齢: 30才未満() 30才以上40才未満() 40才以上50才未満() 50才以上()
- あなたの研究上の社会的環境はどのようなものですか:
 - a) 国公立大学理学部職員 () i) 私立大学農学部職員 () q) 民間企業研究部門 ()
 - b) 国公立大学工学部職員 () j) 私立大学医・歯・薬学部職員 () r) 民間企業現業部門 ()
 - c) 国公立大学農学部職員 () k) 私立大学教育学部職員 () s) 修士課程在学中 ()
 - d) 国公立大学医・歯・薬学部職員 () l) 私立大学教養部職員 () t) 博士課程在学中 ()
 - e) 国公立大学教育学部職員 () m) 高等専門学校職員 () u) 研究生 ()
 - f) 国公立大学教養部職員 () n) 小・中・学校職員 () v) オーバードクター ()
 - g) 私立大学理学部職員 () o) 国公立研究機関職員 () w) その他(具体的に) ()
 - h) 私立大学工学部職員 () p) 国公立行政機関職員 ()
- あなたの仕事において地球化学の占める割合はどのようなものですか:
 - a) 主として地球化学の研究を行っている ()
 - b) 他の研究(分析化学・地質学など)の一部として地球化学の研究を行っている ()
 - c) 研究以外の業務(品質管理、中・高生の教育など)のあいまに研究を行っている ()
 - d) 直接の研究は行っていないが、業務上地球化学の情報を必要としている ()
 - e) その他(具体的に) ()
- 4) においてa)以外の所に○を付けられた方へ:
 あなたが携わっている地球化学以外の研究・業務分野名をお教え下さい。
()
- あなたの地球化学の研究に対する社会的ニーズはどこにあると考えますか(複数でも可)
 - a) 資源問題への貢献 () e) 基礎学問の発展への貢献 ()
 - b) エネルギー問題への貢献 () f) 学生・生徒の教育に役立つ ()
 - c) 環境問題への貢献 () g) その他(具体的に) ()
 - d) 災害問題への貢献 () ()

- 7) あなたの地球化学の研究において用いられている大型機器はどのようなものですか(複数でも可)
- a) 気体用質量分析計 () g) X線マイクロアナライザー () m) 水熱合成装置 ()
 b) 固体用質量分析計 () h) イオンマイクロアナライザー () n) 高温高压装置 ()
 c) 有機用質量分析計 () i) プラズマ発光分析装置 () o) 核磁気共鳴装置 ()
 d) 蛍光X線分析装置 () j) 加速器 () p) コンピュータ ()
 e) X線回折装置 () k) 放射線計測装置 () q) その他具体的に
 f) 電子顕微鏡 () l) 原子吸光分析装置 () ()
- 8) 地球化学におけるあなたの研究分野をお教え下さい。複数の分野を研究されている方は労力の配分に従って ()の中へ0.4とか、0.6とか合計が1.0になるような数値を書いて下さい。対象別、手法別、別々に書いて下さい。

対 象 別			手 法 別		
a) 宇宙物質 ()	i) 熱水・温泉・火山ガス ()	a) 無機元素・化合物分析 ()	b) 有機元素・化合物分析 ()	c) 同位体測定 ()	d) 放射能測定 ()
b) マントル物質・火成岩 ()	j) 地震・土木関係 ()	b) 有機元素・化合物分析 ()	c) 同位体測定 ()	d) 放射能測定 ()	e) 構造・物性測定 ()
c) 変成岩・熱水変質 ()	k) 大気・気象 ()	c) 同位体測定 ()	d) 放射能測定 ()	e) 構造・物性測定 ()	f) 実験・合成 ()
d) 鉱物・結晶 ()	l) 海洋 ()	d) 放射能測定 ()	e) 構造・物性測定 ()	f) 実験・合成 ()	g) 理論・シミュレーション ()
e) 鉱床 ()	m) 湖沼・河川 ()	e) 構造・物性測定 ()	f) 実験・合成 ()	g) 理論・シミュレーション ()	h) その他具体的に ()
f) 堆積岩 ()	n) 地下水 ()	f) 実験・合成 ()	g) 理論・シミュレーション ()	h) その他具体的に ()	
g) 土壌 ()	o) 生物 ()	g) 理論・シミュレーション ()	h) その他具体的に ()		
h) 石油・石炭・天然ガス ()	p) その他具体的に ()	h) その他具体的に ()			

- 9) 日本の地球化学はどのような点に特徴があるとお考えですか。
- []

- 10) 日本の地球化学の分野で特に立ち遅れている分野はどのような分野とお考えですか。
- []

- 11) 地球化学において近い将来特に推進すべき研究分野・方向はどこにあると考えますか。
- []

- 12) 研究を進める上での問題点およびその解決法について
- a) 実験設備上の問題点 []
- b) 組織・体制上の問題点 []
- c) 人材に関する問題点 []

- 13) 日本地球化学会への要望・御意見をお寄せ下さい。9) ~13) については記入欄が小さいので、別の用紙(B5版)に書いていただいてもけっこうです。
- []

- 14) 今後更に御意見・御指導をいただく事もあるかと思います。さしつかえなければ住所、氏名をお書き下さい。
- []

- 3 C02 石灰岩中の炭素質物質のグラファイト化 (名大理) ○富田俊弘・中井信之
- 3 C03 極微量石墨の炭素同位体比測定法とその応用 (静岡大理) 和田秀樹・秋山文孝・伊藤良三
- 3 C04 変成石灰岩の共存する方解石-石墨間の炭素同位体分配とその応用 (信州大理) 森清寿郎
(10:00~11:00) 座長 佐竹 洋
- 3 C05 愛媛県五良津超苦鉄質複合岩体の硬石膏の硫黄同位体比 (岡山大理) ○山本雅弘・柴田次夫
- 3 C06 アンディーン及びエル・テニエンテ斑岩銅鉱床(チリ)の熱水鉱物のD/H, $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ 及びMg/Fe (II) 比 (富山大理・名工大・地調) ○堀 美香・日下部実・内田哲男・松久幸敬
- 3 C07 1つの火山に共存するソレライト質岩系・カルクアルカリ質岩系マグマの起源-安達太良火山のO, Sr 同位体比 (地調・茨城大理) ○松久幸敬・倉沢 一・藤縄明彦
- 3 C08 西太平洋の中生代海洋底玄武岩の地球化学 (筑波大化・茨城大理・神戸大理) ○野津憲治・小沼直樹・藤井直之
(11:15~12:00) 座長 松久幸敬
- 3 C09 南部チリ火山帯の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 比のalong-arc変化 (筑波大化・チリ大理) ○野津憲治・Lopez Escobar・Hugo Moreno
- 3 C10 SBシステムテックスに基づく東北日本火山帯、南部チリ火山帯の比較研究 (茨城大理・チリ大理) ○小沼直樹・高久雄一・Lopez Escobar
- 3 C11 小笠原諸島無人岩の酸素および水素同位体比とその起源 (富山大理・愛知教大・山口大理・静岡大理) 佐竹 洋・田中 守・平井昭子・浦野隼臣・白木敬一・黒田 直
(13:00~14:00) 座長 山本雅弘
- 3 C12 東北日本第三紀火山岩のNd, Sr 同位体比の変化 (京都産業大・カルフォルニア工科大) ○能田 成・G. J. Wasserburg
- 3 C13 U, Thの分別と鉛同位体 (東大震研) 佐藤和郎
- 3 C14 根室層群中のアルカリ岩の同位体年代 (地調) 柴田 賢
- 3 C15 火山灰のフィッシュトラック年代 (学習院大理) 寺田 博
(14:00~15:00) 座長 能田 成
- 3 C16 La-Ba法による希土鉱物の年代測定法の開発 (I) (東大理) ○中井俊一・増田彰正
- 3 C17 熱水作用の影響を受けた珪質岩の地球化学 (名大理) ○山本綱志・杉崎隆一・足立 守
- 3 C18 黒鉱を含むコア試料の化学組成の垂直分布 (群馬大教養・東大理) ○海老原充・中村裕二・脇田 宏
- 3 C19 高温メルトからの鉱物合成及びその利用 (東大RIセ・学習院大理) ○森岡正名・田中優子・長沢 宏
(15:15~16:15) 座長 加藤喜久雄
- 3 C20 希ガス同位体よりみたマントルの分化 (東大理) 兼岡一郎
- 3 C21 珪酸塩メルト-結晶間の希ガスの分配 (東大理) 比屋根肇
- 3 C22 鉱物と有機酸の相互作用について(特に黒雲母とジカルボン酸)その1 (筑波大地球科学・東海大理) ○坂本吉宏・下田 右・香山 勲
- 3 C23 鉱物中の水の抽出に関する問題点 (東工大理) ○大場 武・松尾禎士

D会場

- 一般講演 (9:00~10:00) 座長 松本 良
- 3 D01 堆積物と間隙水の地球化学 (DSDP Leg 87, 南海トラフ, 日本海溝) (地調・東大海洋研) ○川幡穂高・藤岡換太郎・石塚明男
- 3 D02 東京湾の堆積物の環境と間隙水 (東大海洋研・Hamburg大・地調) ○石塚明男・V. Ittekkote・E. Degens・松本英二
- 3 D03 日本海における硫化物硫黄の沈積の変遷と水深との関係 (名大水圏研) 増沢敏行
- 3 D04 堆積物中の硫黄含量と $\text{FeO}/\text{Fe}_2\text{O}_3$ による堆積環境の解明 (地調) 粕 武
(10:00~10:45) 座長 増沢敏行
- 3 D05 深海底堆積物中の微量元素 (東大理) 中村裕二
- 3 D06 ^{57}Fe メスバウアー分光法による深海底堆積物のキャラクタリゼーション (東大理) ○薬袋佳孝・富永 健
- 3 D07 固体高分解能 ^{29}Si -NMRによるアロフェンの研究 (放送大・東大理・国立がんセンター) ○渡部徳子・清水 洋・増田彰正・斉藤 肇
(11:00~12:00) 座長 中村裕二
- 3 D08 四万十帯チャートの地球化学的研究(1)-主成分と微量成分- (東大理・高知大) ○松本 良・薬袋佳孝・岡村 真

- 3 D09 四万十帯チャートの地球化学的研究(2)ー希土類元素等の痕跡元素ー (東大理・高知大) ○薬袋佳孝・松本 良・富永 健・岡村 真
- 3 D10 堆積岩の沈積環境の化学的推定(1) 太平洋底の堆積物の堆積速度と化学成分の関係 (名大理) 杉崎隆一
- 3 D11 堆積岩の沈積環境の化学的推定(2) サブダクション帯の堆積物および造山帯の堆積物の堆積環境 (名大理) 杉崎隆一 (13:00~14:00) 座長 福島和夫
- 3 D12 クロマトグラフィー中の同位体分別とその生物地球化学的意義 (三菱化成生命研) ○水谷 広・蒲谷裕子・和田英太郎
- 3 D13 琵琶湖堆積物コアによる湖の誕生とその古環境変遷の追究 (名大理・京大理) ○中井信之・太田友子・堀江正治
- 3 D14 石炭中の微量元素 (武蔵工大・原子力研) ○平井昭司・鈴木章悟
- 3 D15 秋田県の地球化学図とその利用 (秋田大教) 椎川 誠 (14:00~15:00) 座長 西村弥亜
- 3 D16 紀伊半島四万十帯の天然ガスに関する地球化学的研究 (地調) ○坂田 将・矢崎清貫
- 3 D17 天然ガス中の水素、一酸化炭素及び不飽和炭化水素 (地調) 米谷 宏
- 3 D18 石油産出地域の炭酸塩岩中のn-アルカン (筑波大化学・アブダビ石油) ○下山 晃・近沢克也・原田 馨・大島一精
- 3 D19 堆積物中のワックスエステルについて (都立大理) 福島和夫 (15:15~16:15) 座長 寺島美南子
- 3 D20 バイオ・マーカーによる原油と根源岩の対比法の研究 (石油公団) 町原 勉
- 3 D21 海洋表層堆積物中の non-solvent extractable 脂質の起源と性質 (愛知学院大教養) 西村弥亜
- 3 D22 堆積物ケロージェンと合成メラノイジンの酸化分解生成物の比較 (都立大理) 石渡良志・森永茂生・山本修一
- 3 D23 海洋堆積物中の高分子有機物(Kerogen)の酸化分解生成物 (都立大理) ○森永茂生・石渡良志 (16:15~17:00) 座長 水谷 広
- 3 D24 琵琶湖柱状堆積物中の高等植物起源有機物の分布 (都立大理) ○鶴崎 実・石渡良志・小椋和子
- 3 D25 霞ヶ浦堆積物中の有機物について (地調)

- 寺島美南子
- 3 D26 湖水懸濁物の初期続成作用による変化ー榛名湖のリピッド成分 (都立大理) ○小椋和子・藤沢雅子

講演要旨集 3,500円 (送付のみ可)

申込先 〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学
水圏科学研究所 1984年度日本地球化学会年会準備委員会 半田暢彦

○「朝日賞」

59年度朝日賞候補推薦の依頼が学会へ来ています。締切りが9月30日です。原則として昭和59年1月1日から12月31日迄に完成および完成予定の業績を対象としていますが、長年にわたる業績にも贈ることができます。詳細は、朝日新聞社、企画部「朝日賞」係、〒104 東京都中央区築地5-3-2 Tel.(03-545-0131)へおたずね下さい。

“今シカゴでは”

橋元明彦 (シカゴ大学)

“叩いても死なない”というどなたかの評にも拘らず、不安にかられながら米国での研究生活を始めて八ヶ月。岩石学が自分にもできるであろうか、気難しそうなグロスマン教授とうまくやれるであろうか。SEM (Scanning Electron Microscope) と見掛けより人好きのする教授に助けられております。尤もSEMは張りきりすぎて年間予算を半年で使ってしまったお目玉をくらいました。

シカゴ大学の近況と丁度今アルバカーキで開催されている隕石学会の様子をお知らせしたいと思います。

シカゴ・グループの現状は沈滞期とも充実期とも言えるようです。揮発性微量元素や希ガスの分析を中心とした研究はすでに下火となり、アングース研究室の沈下となって現れているようです。同グループによる比較隕石・惑星学の流れが止まってしまったことは残念です。一方70年代の酸素同位体異常の発見 (クレイトン研究室)、Mg 同位体異常の発見 (ワッサーバーク研究室; カルテク、他) は、安定同位体及び消滅核種の大がかりな研究プロジェクトの推進力となってきました。しかしつい昨年、酸素分子の光分解反応過程で類似の同位体異常が生じうること (Science, 1983)、さらに Mg 異常同位体は Supernova ならぬ Novae の頻々とした活動により現在の星間物質に継続的に供給されている証拠が上って (D.D. Clayton, 1984, LPSC XV)、シカゴ・グループにはダブルパンチとなりました。素過程としての惑星物質の凝縮と蒸発に関する研

究は、前者については1972年 (Grossman) 以来根本的な進展はなく、後者については私が岩石学に転向(?)した為に一時中断という形になっています。

さてしかし。クレイトン研究室では、高温起原と推定される Ca、Al-rich inclusions (CAI) や chondrules の酸素同位体異常の従来様の研究と共に、鉄隕石や石鉄隕石などデータの不足していた隕石群の酸素同位体 (シリケイト部分) の研究に力を入れ始めました。Mg、Si や Ca 同位体についても、核種変換による異常を捜す一方、CAI 間での大きな質量依存同位体分別の惑星科学的な意味に寧ら興味が移ってきています。これはシカゴ・グループのみならず他のグループ (カルテクなど) についても同様のようです。私の研究室では従来通り CAI の岩石学と微量元素の分析を並行して進めています。いわゆる coarse-grained CAI として分類される CAI は、岩石・鉱物・元素共かなり明らかとなり、そこから得られる情報は相対的に小さくなりました。そこで興味は、新手の隕石に含まれる“超”難揮発性の CAI (あるものは Ca! にも乏しく、Al というべきかも知れない) の岩石学・元素分析; 微粒であるがために研究の殆んど行なわれていない fine-grained CAI、amoeboid olivine aggregates の SEM による分析; 尋常でない組織・鉱物構成をもつ CAI の岩石学・元素分析に移っています。

私の見る限り、従来様の研究はほぼ飽和に達して、手をかえ品をかえながら新しい研究の方向を探っているという感じです。

……丁度今アルバカーキに行く途中です。隣席の同僚の Van Ekambaram 氏が日本語の手紙に現われるわずかの英語から内容を推察しようと努力しています。到着前にシカゴの普段の様子を少し語っておきましょう。10:30のコーヒーブレイクに集まる面々は、クレイトン研究室、グロスマン研究室+αの人々です。エンリコ・フェルミ研究所の実験室兼ティールームの一隅に小さなテーブルが設えてあって、両教授の向合いの特定席の他は各人が勝手に椅子を持ち寄ります。グロスマン教授は待ちきれないという風に座る前から弁舌を振ります。話は政治・経済・金融 (特に株)・テレビドラマ様々で私は新聞を読む必要を感じたことはありません。折々データを持ち寄って10分ないし20分 discussion をすることもあります。言わば情報交換の場ともなっています。L. Grossman 教授、V. Ekambaram (以下敬称略)、私、大学院生1名 (以上グロスマン研究室); R. N. Clayton 教授、T. K. Mayeda、R. Hinton、D. Wachel、J. Halbout、大学院生4名 (以上クレイトン研究室); A. M. Davis (J. Frank 研究所); E. Olsen (Field Mus. Nat. History) が私の仲

間です。米6・加1・英1・印1・仏1・中2・日&日系2・アイスランド1と国際色豊かです。シカゴ市自体が人種のるつぼですから奇異な感じはありません。

夏期休暇中なので、毎週金曜日の地球物理学教室セミナー (一部1:30-2:30、二部3:00-4:00) 及び火曜日 (不定期) のエンリコ・フェルミ研究所でのセミナーは休みです。内容は様々。学外からの招待講演は半数に達します。私もフェルミ研でD論の仕事を紹介しました。金曜日といえば疲労も極値なのでセミナーに出席して合法的にリラックスできるのが救いです。セミナーの休憩時間には必ず隣室にコーヒーとクッキーが用意されていてお喋りとなります。とにかく皆話好きなのに驚きます。

さてアルバカーキの隕石学会の様子を紹介しましょう。7月30日~8月2日、New Mexico 大学 (2会場) で開かれました。講演数177で日本地球化学会ほどの規模でしょうか? 春のLPS会議と異なり雰囲気も和やかです。21sessions 中には、各種隕石の名 (Carbonaceous Chondrites etc.) が付いたもの; Chondrules; Asteroids; Isotope Anomalies; Impacts; Chronology 様々です。以下に私の興味の赴くまま幾つかのセッションからトピックを拾ってみましょう。NEBULAR PROCESSES AND REFRACTORY INCLUSIONS では12の論文が発表されました。Refractory Inclusion (RI) の研究は分化・微小化してきました。Amoeboid Olivine Aggregates 中の RI の変成系列 (Hashimoto et al.)、Mighei (C2) 隕石中の Sp-rich RI の岩石学 (MacPherson)、Secandalously Refractory Inclusions (Sc、Y、REE が Cl Chondrite の10³~10⁴倍も濃集している) の発見 (Davis)、Murchison (C2) 隕石中の RI の微量元素の分布 (Ekambaram et al.) などは新しい隕石 (物質) に道を求めたものと言えるでしょう。RIに含まれる微小な (≦10μm) Refractory Metal Nuggets (Fremdlinge と呼ぶ) に関する研究 (2つ)、そして Boynton et al. による RI の rim layers (厚さ20~30μm) の微量元素分析は微小化の傾向とみることができます。後者では、rim が RI の内部に比べて数倍も REE を濃集していることが見出され、新たな問題として注目されています。こぼれ話としてショック・チューブ内での凝縮実験の報告 (Stephens) は、平衡凝縮一辺倒の考え方に警鐘を与えるものでした。ISOTOPIC ANOMALIES では、D. D. Clayton が s-process 起原の Nd isotopes を報告し同氏の Chemical Memory Theory を強化しました。また⁵⁴Cr 同位体異常が Birck et al. により発見されました。COSMOCHEMISTRY では E. Anders が懸案の Pla-

netary Atmospheric Xe と Chondritic Xe の違いの説明として、地球(金星、火星)では Xe が非晶炭素の格子にトラップされているという考えを提唱しましたが、この脆弁(真実の可能性はもちろんある)を唯も論破できなかったのが面白い。U と Th の fission tracks を利用して、RI の rim ; interior でのアクチニド元素(不揮発性元素)の濃集を求めた研究(Murrel et al.)は先の Boynton et al. の発表と共に興味深い。新たな分析技術として REE の濃度を Ion Probe で測定した試みが発表され(Crozaz et al)、その精度が INAA のそれに匹敵することに驚きました。他のセッションでも、Allende Inclusions & chondrules での親銅元素の選択的な depletion (Wark) ; Ordinary Chondrites の岩石学的タイプを変成系列として同定するに足る定量的証拠を提出した論文(Miyamoto et al.) ; 現在の銀河宇宙線や太陽線では説明できない程強い照射(前者の約10倍)を受けた鉱物粒(anorthite)の発見—全ての方向から万遍なく照射されていることから隕石に凝集する以前の event に対応すると考えられる(Caffee et al.) など注目を集めました。都合で最終日午後のセッションに出席できなかったので COSMIC DUST, COMETS AND COMETARY MISSIONS と EARLY SOLAR SYSTEM CHRONOLOGY をのがしてしまいました。Abstract を読む限りにおいて、後者では異種の RI についての Mg 同位異常の報告、消滅核種 (^{41}K 、 ^{107}Ag) の探査の報告が多いようです。前者では分析電頭を威力を発揮した惑星間塵の Micro-Petrography が注目されたに違いありません。

概括すると、大きなニュースはないものの明確な目的意識をもった特徴ある研究が目立ったように思います。来年の隕石学会はフランスのボルドーで開催されます。日本から大勢の方々の参加を期待しております。シカゴも蒸暑い日が続きます。皆様のご健勝を願っております。

未来地球化学サロンへのお誘い

— 20代と30代の研究者・院生の方々にむけて —
皆さんは、21世紀の始め何を研究していますか？何を研究しようと思ってどんな準備を今からしていますか？若くて、頭の柔らかいうちに、お互いにブレーンストーミングを楽しみませんか。上意下達の論議は止めましょう。わたしは抜殻ですからサロンの場をつくるお手伝いをしてみます。来る10月の下旬あるいは11月に東京で半日程度第一回のサロンを開く計画です。うまくゆけば第二回は東京以外でと考えています。御関心のある方は下記に通信先を明記して御一報下さ

い。具体案は追って連絡します。

宛先：〒206 多摩市桜ヶ丘2-37-5、MV 研究所、半田高久

お知らせ

○日本学術会議専門別定員・推薦研連

標記会員選出についての経緯については皆様御存知と思いますが、此度、専門別定員および会員推薦に係わる研究連絡委員会が決定されたむね、通知がありました。関連分野の定員は以下の通りです。なお、学会の登録は8月中旬より始まる予定です。当学会の対応については評議員会で決定次第報告いたします。

第4部 31名、うち、専門では、化学6名、地質科学3名(研究連絡委員会別では地質学、鉱物学、地質科学総合各1名)、地球物理学2名。

○「文部省学術用語集地学編」が出版されました。日本学術振興会発行 丸善出版

○シンポジウム「人類の発展における地球科学の役割—資源と環境—」のプロシーディングスの刊行
1981年に東京地学協会・国連大学共催で開催された当シンポジウムの英文および邦文プロシーディングスが発行された。邦文の抄録版は「地球雑誌」91巻、6号に特集として掲載された。

○国際会議(共催)

International Seminar on Laterite (IGCP PROJECT PROPOSAL) The Behaviour of Element during Tropical and Sub-tropical Weathering Process, Oct. 14-17, 1985, Tokyo Japan

申込先：日本鉱業会、中央区銀座8-5-4

○海外会議

1) IV Congreso Geologico Chileno Aug., 19-24, 1985

IVth CHILEAN GEOLOGICAL CONGRESS, Dept. Geosciences
Universidad der Norte Casilla (BOX) 1280, ANTOFAGASTA/CHILE

2) Zeolite '85

An International Conference on the Occurrence, Properties, and Utilization of Natural Zeolites, Budapest, Hungary, Aug., 12-16, 1985
CENTRAL RESEARCH INSTITUTE FOR CHEMISTRY, HUNGARIAN ACADEMY OF SCIENCES, Budapest (Hungary) P. O. Box 17 H- 1525

1984年度 第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1984年2月25日 17時～19時30分

場所：赤門学士会館

出席者：松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、小椋和子、小倉紀雄、金森 悟、兼島 清、北野 康、佐藤和郎、清水 洋、田口一雄、田中 剛、角皆静男、中村 昇、野津憲治、半田暢彦、松久幸敬、脇田 宏 各評議員

I. 会議にさきだち以下のことを承認した。

1. 前回の議事録を承認した。

2. 会務分担案を承認した。

庶務委員 小椋和子、会計委員 野津憲治、
行事委員 松久幸敬、ニュース委員 田中剛
編集委員 G. J. 関係 一國雅巳

「地球化学」関係 小倉紀雄、
小沼直樹

3. 編集委員長を一國雅巳氏にお願いするにあたり、役員選出細則第6条3項に従って同氏に評議員を委嘱することの提案が会長よりなされ、これを承認。これに伴う同氏の被選挙権および任期の扱いについては、幹事会で検討することとした。

4. オブザーバーとして大隅多加志氏(庶務関係事務の補佐のため)の評議員会への出席を承認した。

II. 報告

1. 庶務委員会(小椋評議員)

前年度からの懸案事項として以下の諸点を列挙、幹事会で検討したいので意見を個々にお寄せいただきたい。

* 寄贈図書のおつかい

* 名誉会員の推挙

* 別刷代金規定の整備

2. 会計委員会

(前年度からの引き継ぎが済んでいないので小椋評議員から) G. J. 代金値上げに伴う未収金の扱いについては、幹事会で検討したい。

3. 編集委員会

(一國評議員からのメモ)

G. J. Vol. 17 完結した。

Vol. 18 No. 1 著者校正済み。
No. 2 原稿は、揃った。

1984年分として、すでに11編の投稿を受けた。また、1983年分の実績は、投稿43編、却下あるいは取り下げ9編。

(小倉評議員)

「地球化学」17巻2号 発送済み。18巻1号は、

6月末に発行予定。

同2号は、小沼委員により、特集号を企画中。

4. ニュース発行委員会(田中評議員)

2月7日付で100号を発行、記念号とした。101号は4月15日原稿締め切り。

5. 行事委員会(松久評議員)

1984年2月例会を2月25日午後実施した。松尾新会長による会長講演で、38名の出席があった。

6月例会は、高温領域での元素分配に関連したテーマで交渉中。

6. 日本学術会議関係

(松尾会長) 1月24日の地球化学・宇宙化学研究連絡会に出席、法改正に伴う改組について説明をうけた。会員選出の母体となる学協会の認定および登録が行なわれる予定。

(増田副会長) 2月15日の学術会議と学協会との懇談会に会長の要請で代理出席。新会員選出の日程など説明をうけた。

7. その他

Pacific Basin Chemical Societiesについて、convener のひとりである石渡氏からの資料により小椋評議員から説明、松尾会長が補足説明。

III. 議事

1. 1984年度年会について

半田評議員より年会の実施予定について説明があった。

2. 学会事務センターとの今年度の契約

提示の契約を承認し、この形で今年度の契約を結ぶことにした。また雑誌保管料節約のため G. J. 印刷部数を1300に削減すること、来年度の契約については内容に変更がなければ、庶務に一任することとした。

3. 下記のとうり承認。ニュースに入会者の住所を掲載することとした。

(ニュース101号に掲載済)

— 会員現状 — (1984. 12末現在)

1983年8月	864	12	2	878
入会	16	0	0	16
退会	8	0	0	8
1983年12月	872	12	2	886

4. 「将来計画委員会」設置について

評議会での Free Discussion を重視することで、標記委員会の機能を果たすこととしたいとの会長の発言に引き続き、ニュース100号所載の新会長挨拶の内容に関連して、地球化学振興の方策について各評議員から、発言。議論をしめくくる形

で、会長より将来計画委員として角皆評議員に取りまとめをお願いしたらどうかとの提案があり、これを承認。角皆評議員からは、脇田評議員に参加を要請、また増田副会長に顧問格で加わってほしい旨、表明がありこれを受諾。

5. 学術会議への会員候補者推薦

地球化学・宇宙化学研究連絡会は、連絡委員会への昇格の要望を提出、本会としても会員候補者ならびに推薦人を選定する必要があると、増田副会長から、説明。この方針を了承。10月ごろに予想される選定依頼にそなえて次回評議員会において決定することとした。

6. その他

田口評議員から、本会としての賞（とくに若い人のための）の設定の検討につき発言があり、将来計画委員会で議論してもらうこととした。

○会員現況

新入会員（1984年1月～4月）

渡辺紀元（北海道工業大学）061-24 札幌市西区
手稲前田 419-2

亀谷勝昭（国立衛生試験所）158 世田谷区上用賀
1-18-1

高谷尚人（山下・大音特許事務所）（自）152 渋谷
区初台1-54-4-606

佐藤夫二男（仙台市衛生試験所）（自）985 多賀城
市鶴ヶ谷2-7-8

小前隆美（農林水産省農業土木試験場）（自）305 茨
城県新治郡桜村並木4-910-101

島田寛一（西日本技術開発㈱）810 福岡市中央区
渡辺通1-1-1 サンセルコ電気ビル別館

大山準一（気象大学校）277 柏市旭町7-4-81
渋谷靖弘（東京大学理学部地質）（学生）113 文京
区本郷7-3-1

近藤 寛（長崎大学教育学部）（自）851-31 長崎
県西彼杵郡琴海町西海郷1755-81

石坂信之（神奈川県温泉地学研究所）250-03 神
奈川県箱根町湯本997

住所変更

桜本勇治（自）356 川越市大字今福1672-1-112

高橋 清 海外→ 帰国（地質調査所 地球化学課）

田中教幸 → Dept. of Geology & Geophysics
YALE UNIVERSITY P.O. BOX 6666
NEW HAVEN, CT 06511 U.S.A

KEIKO HATTORI → Dept. of Geology, UNIVER-
SITY OF OTTAWA, OTTAWA, ONT
KIN 6N5 CANADA

SAHEURS, J.P.G. → 6154, VOYAGEUR DRIVE
ORLEANS, ONT K1C 2W3 CANADA

入会手続きについて

日本地球化学会の会員数は、数年、横ばいの状態です。学会発表、会誌への投稿は会員である必要はありませんが、なるべく多くの人に支えられてこそ学会の運営は成り立つので、現会員は積極的に会員増強をすすめて下さい。今年度から年会の際にも受けつけるようにいたします。また、学会事務センターおよび庶務幹事へお申し出下されば、申込用紙をお送りします。なお、入会の際には、推薦者の必要はありませんので、お気軽にお申し出下さい。庶務幹事：小椋和子（東京都立大学・理学部） 電話 03-717-0111（内線：340）

ニュース記事や御意見をお寄せください

本ニュースは年3回（大体5月、9月、1月）発行されます。記事は横書き1行24字（用紙は自由）にて書いていただければ助かります。次回103号は1月10日/切1月下旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛、清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル（4F）
日本学会事務センター内
電話 東京03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833